

域記の物語を摸したもので無く、又彌勒菩薩を表徴したもので無いと思ふ。殊に隠密の所に置かるゝものであるから云々の説の如きは餘りに佛教精神に理解が乏しいと考へられる。何んとなればボロブドゥルの建立時代と年代に於て餘り遠からざる處の吾邦の奈良朝の諸佛菩薩天人等の像を見ても知らるゝ如く、假令表面よりは到底見る事能はざる部分或は靴の中に在る足指迄も一々叮嚀に作られあるを見ても、當時瓜哇に於て熱烈なる信仰に依つて造顯せられた、此大修法場のボロブドゥルの而も中央の大塔内に、斯の如き賤劣なる動機を以て彼の未完成佛が安置せらるゝ筈が無い事と思ふ。私等が此像の顔面等を見て直ちに想ひ浮ばるゝ事は、寧ろ之は石工が彫刻中に刻み損ふたものでは無いかと疑はれるのである。そして何所かに置かれて居たものを、前記の十九世紀頃誰かに依つて持ち込まれたのではあるまいか。假に其搬入が野盜等の姦策に出でたもので無いにしても村人等の悪戯かも知れぬのである。要するに誰しも此謎に對しては斷案を下し得無いのであるが、前記の諸



廊下と龍寺



下廊五第

説は餘り感服し得ぬのである。殊にポロブドゥルの壁面上に所々に未完了の彫刻があるのであるが、此問題の佛像も、唯單に未だ彫刻中であつたものが塔の近傍に無意味に残存して居たものと想像しても何等不思議は無いのである。

八、石材

Andesti lavaと稱する灰色の氣孔の多い粗面岩である。之を普通トラカイトと呼んで居るが、三浦秀之助氏の話に依るに或る學者は安山岩であると言ふて居るとの事である。吾邦の輕石と普通呼ばれて居る石に似て一層硬い火山岩である。瓜哇に於ては一般に此種の石材を穿つて、其れに水を湛へ滲透せしめ、瀘水石に使用して居る。現に私等の農園に於ても之を用ひて居たのである。

九、彫刻 Relief

大陸諸刹の彫刻との比較
其様式は總て薄肉浮彫では無くして厚肉浮彫である。克く比較に出さるゝ Angkor vatの如きは砂岩に淺く刻まれて居るのであるが、ポロブドゥルに於て

は火山岩の粗面を苦心して直角に深く刻んで居る。そして柔軟なる線であるに拘はらず其像は比較が正しく、行動が自然であり、而も態が多種である。就中遠景を描く技能は明に Khmer 風の最古のものに等しいのであつて Angkor vat には素より其様なものは無い。印度本土に於ては Gandhara Amaravati 及 Benares を除けば之に比肩するものは無く、實に東亞の佛教美術中最なるものである。そして一般考案上又は裝飾上の兩面より觀察して、其影響は犍駄邏では無く、寧ろ南方印度の Amaravati の直接影響と見るのが自然であるとフーシエーは云ふて居る。

彫刻の現
存數

普通ボロブドゥルの壁上彫刻面の數を二千百四十一、現存のものを約千六百と稱して居るが、其詳細は左の如くである。

(1) 外壁面	(上)	408	408
(2) 外壁面	(下)	568	160
(3) 第一廊下前面	Outer terrace	568	160
(4) 第一廊下後面			
	First terrace	808	240
		372	120
		128	120
		120	120

(壁面に現れず)

(5) 第二廊下前面	Second terrace	300	192	100
(6) 第二廊下後面				
			108	128
(7) 第三廊下前壁	Third terrace	253	165	88
(8) 第三廊下後壁				
			88	88
(9) 第四廊下前壁	Fourth terrace	212	142	84
(10) 第四廊下後壁				
			70	72
		2141	1868	(現存)

此ボロブドゥルの壁面彫刻は假に二大別して見る事が出来る。

- a. 單に裝飾的の意味のみのもの。
 - b. 宗教的物語を刻むもの。
- (I) 裝飾的浮彫。

之は何等の歴史的、或は宗教的等の物語を表現せずして、單に象徴的の裝飾物の様である。そして其數は非常に多數であるが、大體に於て同一の Motive

を繰り返して居る。即ち

(イ)、一人の男が花瓶又は香爐の傍に佇立して居る圖。

(ロ)、一人の男が二人の女の間に行立して居る圖。

右の二種の構圖の間には、蓮花或は他のものを持つて居る一人の女性が居る浮彫が必ず置かれて居るのである、之等の彫刻は一八九〇年に發掘せられた、彼の最下層の百六十の彫刻圖を秘する壁面との中間に非常に距離を隔てゝ居るのである。

此外に外壁上にある百四の龕寺と龕寺との間にある dragon の前面に二様の浮彫がある。左の如くである。

(イ)、花瓶又は香爐を持った男又は女の像。

(ヨ)、花瓶と香爐とを兩方持つて居る像。

又單に浮彫圖面の枠として多くの立派な Flower chain や Garland がある。唐草模様 (Arabesque) と螺旋模様 (Spiral Motive) もある。尙ほ上層の廊下には花瓶に花を

あしらつたものがある。龕寺の裝飾としては皆其上部に Monster の頭があり、兩側には Makaras がある。各門は全て頂部に良好なる彫刻がある。殊に第四壁のものは前にも記した如く天態動物の彫刻が入口にある。

(II) 物語を表す浮彫。

其作は真に上乘のものであつて、殊に人物の表現法に於ては佛教美術の頂上に發達爛熟した時代の者であるから、他に殆んど其類例を見出し得無い程である。併し其彫刻面上に現れた多くの種類の人々の個性及び特徴を明かにする方法に於て幾分欠けて居る爲めに、其判別をするに際して餘程困難を感じる場合がある。例へば一畫面中に二王を示す際等は其識別に苦しむ事があるのである。其れと今一つは人物の彫刻を得意とした爲めか、餘りに圖中に人物が多きに過ぎる感じは無い事はない。併し之等の事は別に此立派な浮彫の價値を傷ふ程のものでは無くして、寧ろ特長として見るべきものかも知れぬのである。一般に外壁面下に埋められて居る地獄の圖の列を除いては流石

に、佛教的のものであつて、殺伐な種類に属する物語は凡て避けられて居る。又建築上の價值としては大部分失はれて居ると稱せらる此ポロブドウルも、宗教物語的の方面に於ては非常に大なる効果を有するものである。其數量の豊富なる事と共に吾人に與へる影響は甚大なるものである。普通今日迄に紙上に於てのみ見た吾人が實に天才的の巧妙なる浮彫を以て、石壁面上に連載せられた此經卷を拜觀する時は眞に感慨に堪へぬのである。塔全體の設計云々に於ては或は不備の點も存するかも知れぬが、其れ等の事は總て此精巧無類の彫刻に依つて充分に償ひ得る事と思ふ。

彫刻畫として表はされたる經典

又此壁面の題目に付いては、從來多くの學者に依つて論議せられて居るが Ijzerman, Pleyte, Wiien, Leeman, Groneman, Oldenburg 等に依つて、大略解譯せらるゝに至つたのである。之を表示すれば左の如くである。

- 一、地獄 外壁面下段。
- 二、佛陀傳 第一廊下後壁上段。

三、本生譚及譬喻經

- 第一廊下後壁下段。
- 第一廊下前壁上段。
- 第一廊下前壁下段。
- 第二廊下前壁。
- 第二廊下後壁。
- 第三廊下前壁。
- 第三廊下後壁。
- 第四廊下前壁。
- 第四廊下後壁。

- 四、華嚴經
- 五、彌勒經

(其他の菩薩を含む)

六、普賢經

- 第四廊下後壁。

佛陀傳

第一章 序 説

第一廊下の後壁上段の列に刻まれた、佛陀の御生涯の浮彫は、東側階段の所から出發して、逐次南側階段の方へ進みつつ巡拜すべきである。かくして南西北より元の東側入口に歸る。即ち鉢喇特奇拏(Pradakshina)に據つて、中央の大塔を常に右に見ながら繞る方法を採用して經行する順序に配列せられて居る。其浮彫の数は百二十あり、其圖面の高さ(縦幅)は〇・七乃至〇・八米突、長さ(横幅)は二・四米突である。



此列が佛陀傳である事を最初に發見した學者は Wissen である。終に西紀一九〇一年に至つて C. M. x Pleyte 博士に依り、此百二十の彫刻圖面(Panel)は大方廣莊嚴經(Lalitavistara)を表はすものであるといふ事の詳細な説明書が出版せられたのである。茲に同博士の Die Buddha Legende in Skulpturen des Tempels von Boro-Budur. 及び故堀謙徳博士の「美術上の釋迦をクロム博士の説明書に参照して、簡單なる解釋を以下に列記する。

第二章 東南の部

第一、在天當時の菩薩(釋尊)。

釋尊は前世に於て三十波羅密を行じて 兜率天(Mitra)に生を享け、天衆を化導せられて、其名を淨幢(Cvetaketi)と言はれた。大莊嚴經卷の一に現はれて居る様に、菩薩は兜率天に生れて、其天子となられ、諸天は恒に之に供養奉仕した。そして遂に天界を去つて人中に生れて阿耨多羅三藐三菩提を証せら

れるのである。「佛諸比丘に告ぐ、天宮の中微妙安樂の處ありて、高閣、重門、層樓、大殿あり。……處々に盈滿せる諸天姝女、天の伎樂を奏す。諸天子等大いに法堂に集つて菩薩を圍繞し、説く所の無上大法を聽き、貪瞋橋慢一切の煩惱を斷ち、廣大の心を生じ、踊躍歡喜して安樂に住す」とあるが圖は之を表はしたのである。

釋尊の前生である淨幢菩薩は天宮に住し、寶臺上に結跏趺座し、頭周に光明を放つて居る。左右に二人づゝの天人が奉侍して、二人は拂子を執つて居る、是れは王者の表章である。宮室の外の右側下段に天人が居て、一人は燈火を執り、一人は蓮華を把り、一人は樂を奏して居る。宮室の左側下段に天人が多く詣て、雲上には天人來集歡喜し或は拍手して居る者もある。

第二、菩薩降下の評定。

未だ兜率天に居られた頃、梵天王(Brahmā Svayambhūti)天帝釋(Cakra)以下の諸天は、菩薩が將來佛陀となつて民衆を救ひ給ふべき事を知つて、菩薩に人界に降つ

て衆生を濟度せられる様に乞ふた。菩薩は其降神せられる時、方、國、族に關する處の四種の觀世をせられて、遂に人壽百歳を以て、印度中天竺迦毘羅(Kapila-vastu)の城主淨飯王(Cuddhodana)の皇后摩耶夫人(Māyā Devī)を生母となすことに決せられた。そして如何なる形體を取つて神を母胎に降すべきかと云ふ事が議せられた。

師子座に結跏趺坐し給ふは菩薩で、來集して居るのは丁度諸天等が其降下の形象を儒童の形、帝釋、梵天の形、或は大王の形等と論じた結果、紅頭六牙の白象と現じて母胎に宿ることとなつた評議の處である。

第三、吠陀ベイズの説法。

諸天等が恭敬禮拜して菩薩を見奉るに、何所よりか聲があつて十二年の後菩薩は其母胎内に入るべしと聞けた。此聲を聞くや忽ち之等の天人等は、其神々しい姿を捨て去り、婆羅門の形に身をやつして印度へと飛行した。それは其地に於て吠陀を解かんが爲めに降つたのである。

圖面は甚だしく損傷せられて居るが、吠陀を解いて居る婆羅門や、飛翔して居る天人、聽衆等を見得るのである。

第四、菩薩の降天を喜んで飛遊する天衆。

かかる中に又他の天衆等は印度に降下して、辟支佛(緣覺)となつた。そして謂ふて曰く「十二年の後に菩薩は地上に降り、佛陀の教へを垂れ給ふべし」と。此時に王舍城に「白象」と稱する羅漢が居た。彼は此話を聴くや石を撲ちつける様に地上に降りて、直ちに空中高く七城を築き、流星の様に姿を消し去つた(Rissipadam)の物語)。此時に又ベナレスに居た五百の羅漢も亦此物語を聞いて、空中高く七城を築いて忽ち消れ去つた。

三人の羅漢は樹下の蓮臺上に於て禪定に入つて居る。右端には尙ほ一人の辟支佛が其蓮華座上に飛下せんとして居る。左方の上空には一天人の飛行するを見る。林中には雌雄の野鹿が横はつて居る。

第五、降天前の説法。

降天に先立つて、百八つの尊い法門は説かれた。此時に八萬四千の得道の天衆は曼荼羅華を雨ふらして、菩薩を頂禮讚美した。

天上の多くの菩薩の群は跪いて師子座に説法の菩薩(釋尊)を禮拜し讚美して居る。

第六、彌勒菩薩に寶冠授與。

天衆は菩薩の佛足を頂禮して悲んで眞に尊い菩薩よ。菩薩の去られし後は此愛する兜率の宮殿も最早光を失ふならん」と、謂ふた。菩薩は之に應へ「未來に於ては彌勒菩薩が汝等に法を授くるならん」と曰ふて、彌勒菩薩を補處に位置せしめ、菩薩自身の頭から寶冠を取つて彌勒の頭に戴せられた。そして「吾が去りし後は、汝尊敬すべき菩薩よ、御身は最も高き圓滿なる智慧の法門を良き人々に垂れよ」と告げられた。

臺上に坐して居るのは彌勒、立つて寶冠を親授するは菩薩である。優良な天衆は坐して此典禮に列して居る。

第七、菩薩降天の形體の議定。

菩薩は再び天衆に對して、問ふて「如何なる姿に於て母胎に宿るべきか」と言はれた。例の多くの姿が茲に擧げられた、併し一つとして目的に適合したものは無かつた。遂に既に仙人(Ṛṣi)になつて居た Dhṛatya が言ふに「菩薩は今や三妙に通ずる婆羅門を教戒せんが爲に行かせ給ふものなれば、必ず彼の氣高き姿を爲す、力強き象として、身には光り輝く金の綱を掛け、頭には赤色の徽を戴き、威容堂々三十二相を具足して母後の胎内に入り給ふを要す」と。

菩薩は寶座に、天衆は皆跪いて、各自考案を廻らして居る姿態をして居る。

第八、王妃と淨飯王。

天上に於て熟議中に、一方迦毘羅城中に於ては八つの前徴が現れた。百花は時ならぬ時に於て滿開美麗を極めた。凡ての害蟲毒蛇は姿をかくした。雪山からは千種百態の諸鳥が來つて、喜んで飛遊囀鳴し、崇高な宮殿の屋根や軒に座した。四季に生すべき果實は一時に成熟した。苑池は車輪大の蓮花を

以て一時に覆はれた。王の倉廩は日々米穀を取り出さるるに拘らず其量は少しも減じなかつた。後宮に鳴り響く音樂は絶えず妙音を傳へた。宮殿に蓄へられた金銀寶珠は箱の中に藏められてあるに拘らず、其光は燦然として外に迄輝いた。かくの如くにして王宮は光明が四方に放たれて日月の光も尙し墨の如くせしめられたのである。

中央の殿中寶座に王と王妃は悅豫して坐し給ふ。宮女、廷臣、婆羅門、武臣は其周圍に奉仕し、樹幹には華果が豐滿して居る。

第九、宮室に於ける王妃。

インドラ(天帝釋)の園に於ける若い天津乙女の如く愛らしい姿の王妃は、宮女等に傳づかれて其宮室へ行き玉ふた。そして花の香が非常に薫しく漂ふて居る寶床に安臥せられた。

右手に蓮華を把つて摩耶夫人は坐し、拂子を捧げた兩人の侍女に傳づかれて居られる。天女は空に飛遊し、姦女宮臣は地上に跪いて侍衛し、愛すべき

鳥獸は果樹の上に戯れて居る。

第十、天衆菩薩に隨從に一決す。

天宮に於ては帝釋、梵天、四天王其他無數の天衆は會集して羣議した。「誰か克く真心より菩薩に隨伴し奉るべき」この聲に對して、「吾々こそ先づ附隨せざるべけれ」と稱して全部舉つて扈從する事に決議し、并せて菩薩を讚美した。諸天が鳩議して居る殿堂の遙か後方に、菩薩の宮殿が望まれる。

第十一、兜率天に於ける最後の崇拜。

天女等は聖母と定つて居る乙女摩耶に對して好機心を持つた。そして此王妃の爲めに盡さんと、各自驚くべき美はしい冠に花の馨を一杯戴せて、此長生不死の國の住家を消へ失せ、迦毘羅城指して出發した。淨飯王の城の宮殿の高い塔に達した時に、天女達は長い羅衣を纏ふて、身には光り輝く光明をつけた。そして空中に浮んで、美はしい王妃を指さして讚美し唱ふた。此時に天使等は多くの諸菩薩や他の天界の諸神等と共に菩薩の處に詣でて、其降

誕の前に今一度彼等の崇敬禮拜を爲した。其上で全天衆の隨從の決議を菩薩に奏上した。

師子寶坐に座し給ふ菩薩を諸天は牀上から最後の恭敬禮拜をして居る。

第十二、菩薩の降神。

菩薩が兜率天から降り給ふに當つて、梵天王、天帝釋、四天王等が相率ゐて隨從し、威儀甚だ盛んである。此時に天人等は皆相集まつて「今菩薩降天し給ふに當り、吾々諸天が侍從せざるは、實に菩薩の恩養を識らざるものなり」と言ふて菩薩を侍衛した。

菩薩は宮殿に住し、勝藏師子座に坐し給ふ。百千の天衆は之に奉仕して人界に降る状を示して居る。天人は各々寶蓋、白拂、燈明、幢幡等の總て帝王の標徴を捧持して居る。之は菩薩は人天の法王なる故を以てである。寶座の下に雲のあるは天空を下るの意であつて、幢幡が翻つて居るのは降下の速度大なるを示したものである。

第十三、摩耶夫人の靈夢。

冬節が過ぎて春分の中、吠舍佉月(Vaishakh)陽曆四月後半より五月前半に至る) 叢林の華葉は鮮澤であつて愛すべく、寒からず、暑からず、互に宿合ふの時に於て、三界の勝人が天下を觀察し給ふたのに、白月圓滿であつて報沙星(Pausa)は正に月と合ふて居た。菩薩は此時に、兜率天から没して母胎に入られた。聖后は是の時に靜に睡眠して、下の如き夢を見給ふたのである。「菩薩は白象の形となつて、六牙を具足し、其牙は金色であつて頭上は紅色である。形相諸根は悉く皆圓滿して居て、正念正智を以て神を降して、右脇から母胎に入られた。」

寢殿に安臥して眠り給ふは夫人。其左には燈光があり、右には五人の侍女が居て、一人は扇子を持つて扇ぎ、一人は王妃の足を撫でて居る。左上には金蓋を附けた白象の菩薩は蓮臺に乗つて降下し、其下には天衆が恭敬して居る。又床下や宮殿外には臣僚等が侍護して居る。



(尊釋) 薩菩の時當天在 (1)



神降の薩菩 (12)



夢靈の人夫耶摩 (13)

第十四、諸天の王妃守護の合議。

其晩に四方の大臣共や廿八の藥叉族の頭等其他のものは、天帝釋の處に至つて相談の結果、彼等も總て協力して王妃を守護する事に決議した。

中央の殿中に坐するは帝釋天である。

第十五、無憂園に於ける摩耶夫人。

翌る朝王妃は目を醒して、未曾有なり、我れ未だ是の如く妙好嚴飾具足せる象あるを見聞せず、又我に之を語れる何人も無し。崇高にして、宗教味に豊かなる殊象よと獨語を謂はれた。王妃は喜悅のあまり、衣服や裝飾の事は氣にも留めずに寢殿を去り、多くの宮女に取繞かれて庭に出で、無憂林 (Anāpala) に入つて休息所に腰を下された。そして使を遣つて夫君淨飯王に來臨を請はれた。

華果豊かに、禽鳥囀鳴して居る朝の無憂園に、美はしい摩耶夫人は遊歩して居られる。其前には一人の侍女が跪いて命を承つて居る。遠くには王宮が

表はされて居る。

第十六、淨飯王無憂園に來臨。

王は此話を聞いて、王座を立ち、星學者や貴族、高僧を従へて無憂園に行かれた。園に入らんとして王は身に非常な重みを感じて立ち止まられた。王は其理由を考へ乍ら園内を一目見遣つて謂はれた。「吾未だ嘗て此の如くなるを識らず。吾が英雄帶に於ても尙ほ此重みある事なし。今日吾が家にさへ赴く能はず。噫如何なる大事の出現せんとするにや。更に可解すべからず。」

室内には王妃は坐し、王は諸臣を従へて立ち止つて居られる。王妃の使は王の前に跪いて傳奏して居る。

第十七、摩耶夫人の夢物語。

天から聲があつて「兜率天より汝の一子降誕せん。而して其王子は剃髮して山に入り佛道を修業せん」と云ふた。王は驚異の眼を見張つて夫人を顧て「妃よ

！何の異變かありし」と問はれた。王妃は答へて「眞に純銀或は白雪の如く輝いて美はしく、其光り日月に勝れる一の殊象妾の胎内に入り、數万の天衆は吾を譽め讚へたり。然れど妾に其意解すべからず。願くば、吾が君よ、速に吠陀及び優波尼沙陀ウバニサドに精通せる婆羅門を呼び寄せ、眞理に従ふて妾の夢を解かしむべし。猶ほ又此夢は吾が家に對し吉凶何れなるかを説かしめ玉へ」と白された。

殿上には王と王妃は對話し給ふて居る。

第十八、靈夢の解釋。

王は古典に精通した婆羅門耆德六十四人を宮中に召し、厚く遇して靈夢を占せしめられた。彼等は答へて「皇后に慶事あり。王女に非ず、皇子なり。若し月天右脇より入るを見給はば、在家の轉輪聖王(Cakravartin)を生み給ふべし。然れども白象右脇より入るを見給ひしなるを以て、其王子は三界の無上尊、大導師となり、甘露の法雨を灑ぎ、煩惱の大海を度脱せしめ、よく世の

迷園を破り給ふなるべし」と謂ふた。

位置の高い婆羅門は牀上に坐し、其他の沙門は地上に跪いて居る。婆羅門は弟子衆を率ゐて至り、無憂樹の茂生して居る庭園に於て占夢を奏して居る。王の臣僚の多くは庭内に跣座奉仕し、或は寶蓋を捧げ、或は椰子扇を執つて居る、背景には遙に王宮を見る。

第十九、婆羅門に布施す。

淨飯王は此占夢を聞いて非常に悦び、金銀の器に乳糜麩蜜を盛つて婆羅門に施し、又衣服黄牛を賜ふて厚く之を賞して歸へらしめ給ふた。同時に國中民衆にも施與は爲された。

圖面は約ば前同様であつて、婆羅門僧は盛んに布施を受けつゝある。

第二十、諸天は聖母に宮殿を捧ぐ。

此時に當つて王は摩耶夫人を今後住はしむるに如何なる宮殿を以てすべきかを考慮し給ふた。四天王は來つて「王よ之が爲に心を惱まし給ふ勿れ、吾々

に於て好適の宮を奉獻すべし」と言ふた。又帝釋天は自己の宮殿を捧げ、他の諸天も亦主張するに各自の宮殿を呈する事を以てした。そして誰一人讓歩するものが無く、終に彼等は各自其宮殿を迦毘羅城に將來した。

諸天は殿上に合議し、諸宮臣は外に集會して居る。

第二十一、凡ての宮殿に聖母の姿を現す。

併し夫人は之等の諸天の捧げた宮殿には住み給はずして、淨飯王が夫人の爲めに特に精美を盡して築營し給ふた宮に居られた。併し菩薩は大寂定の力により摩耶夫人の姿を諸天の呈した總ての殿中に現じ、寶牀上の夫人の右脇に菩薩自らを顯はし給ふた。是に於て諸天等は夫人が特に自己の捧げた宮を撰び給へる事と考へて満悦した。淨飯王も斜ならず喜び給ふた。

各々の殿中に夫人は坐し、太子は其傍に居られる。

第二十二、摩耶夫人の施療。

迦毘羅城は宛然極樂世界であつた。城中の人民も、天、龍、夜叉、乾闥婆、

阿修羅、迦樓羅も夫人の姿を見て忽ち悉く喜悅した。囚人は急いで市外に出た。病に悩み苦しめるものは夫人の許に詣でて、彼等の右手を自分の頭に置くや忽ち病は癒へた。又夫人は病者の爲めに藥草を施與して之を治療し給ふた。

寶牀に坐して施を命じ給ふは夫人であつて、侍女をして病痾者に施藥せしめて居られる。

第二十三、迦毘羅城の大施會。

菩薩聖母の胎内に在す間は諧調の音樂は晝夜妙音を傳へた。諸天は風雨を節度に交換し、星晨は正しく軌道を運行した。王は四城門、四衢道に大施を催して、香華、臥具、田宅、騎乘、一切の求むる所は皆悉く喜捨し給ひ宗教上の會式は總て之を盡された。

圖は人民が衣食等を施與せられ、百庶皆喜んで居る所である。

第二十四、梵志としての淨飯王。

釋迦種族の者は雨季は家居して樂んだ。淨飯王は俗世の諸事を捨て、清淨にして美はしい宮嬪等に交る事さへも避けられた。そして一梵志として仙人の如き宗教生活に入り給ふた。

王は梵天の法を志求する婆羅門の一求道者の姿をなして牀上に坐して居られる。

第二十五、迦毘羅城の奇瑞。

托胎將に十ヶ月にならんとして、菩薩の誕生は近づいた。此時に淨飯王の宮苑には三十二の驚ろくべき奇瑞が生じた。總ての樹草は悉く芽を出して繁茂せず、苑池の蓮華は美はしい芽を生じて未だ咲かず、果樹は何れも果實を附けて熟さず、八樹は成長し、多くの寶藏は現はれ、姦女の殿堂には寶石の坑は現はれ、温泉、冷泉、香水泉、香油泉は湧出した。雪山の麓からは小獅子が來つて迦毘羅城の周圍に道ひ、遂に城門に腰を据わした。併し人々には何等の危害も加へ無かつた。五百の若い黄白色の象は王を訪れ、鼻を以て地を



臨來に園憂無五飯淨 (16)



啓行の圖尼昆藍 (27)



誕降の佛 (28)

掘り或は王の手足を撫でて媚を呈した。王の宮殿内には天人の子等が戯れ遊び、宮女の殿中には山海の女神は群れ集ふた。

城門には小獅子は坐し、王の膝には諸天の子等が戯れ、小象の群は王を訪れて居る。

第二十六、王と夫人の装身。

空中には龍女が供物の器や孔雀の羽扇を携へて現れ、一萬の醇酒の樽は街衢に轉り出で、一萬の天女の如き美人は其頭に佳き香水の器を戴いて現れ、一萬の天女は手に寶蓋、幢幡等を把つて顯れ、數十萬の螺貝、角笛、銅鈸、旗幟、鐘鼓を執つて出て來た。風は吹く事を止め、河川は流れを停め、雷霆は震はず、日月星辰は運行を留め、報沙(Pausa)星座は觀るを得た。珠玉の礦坑は宮苑内に發はれ、火は燃ゆる事を止めた。寶塔、宮殿、城門上の網には寶珠が懸つた。空氣は清澄、純淨に、到る處香氣は濃郁として薫じた。烏梟鷹狼豺等の猛禽惡獸は聲を潜め、妙音は絶えず鳴り響いた。街衢、市場は花毛

甍を以て敷き詰められ、屋内には出産の苦痛の聲は聞かれなかつた。時に聖后摩耶は初夜に起きて服飾を着け、淨飯王の所に詣で、園觀して法典を思惟するを希ふ。大王よ許させ給へ」と願はれた。王は答へて「今聖人を懐く、衆果芬華甚だ喜ぶべき彼の園に行きて觀るべし」と宣ふた。そして迦毘羅城から夫人の父王の居城たる提婆訶城に至る道路を修めしめ、一切の荆棘砂礫糞穢土塊を除き、香湯を地に灑ぎ、種々の妙じき花の香を其地に散らさしめられた。又夫人は諸種の花鬘、瓔珞を以て装ひ、諸の音楽を奏せしめ、大王の威風を以て諸々の侍従を寶車に従へ、姝女は之を圍繞して、藍毘尼園に遊觀し給ふ事となつた。

圖は王も王妃も各々自分の室に歸り、妃は出發の爲めに盛装し給ふのである。

第二十七、藍毘尼園の行啓。

今聖胎を懐ける夫人は、佛母の常として菩薩降誕後生命長からざるを知り

給へると、古代印度の習慣とにより生國に歸り分娩せんとせられた。途中父王が夫人の爲めに兩城間に設け給ふた世に雙び無き一大林園藍毘尼に向ひ給ふた。夫人は大白象に安然端坐し、天人は微妙の寶帳を夫人に垂れた。鹵簿には一萬の勁い香象を七寶を以て飾り、黄金の鞍を置き、復一萬の紺青の毛色の善馬に黄金の馬装を施し、次に復一萬の四頭立の寶車に幡蓋を張り、衆くの鈴を懸け鏗鏘と鳴らし、次に二萬の近衛の勇士は身に甲冑を着け、手には弓箭、鬪輪等の兵器を執つて扈從し、其後には萬の寶車は肅々と續いて、瓔珞を戴き華やかな裳を着けた十千の妃嬪は之に乗り夫人の前後左右に隨從した。王は更に警備を嚴にして、浪人輩が夫人の御車に近づかぬ様に、又諸妃嬪の列を亂さぬやうにし、唯童女のみを夫人に侍らしめ給ふた。梵天王、天帝釋、四天王は皆共に翼從して、諸の天華を散じた。此時に當つて娑羅樹の樂園藍毘尼の樹木の幹枝は悉く華果を載せ、色蜂鳥禽は來つて華枝の間に妙音を轉じ、池水は湛わて瑠璃の如く、地には摩尼を始め多くの寶石が敷き

満ちてあつた。

梵天、帝釋等の諸天は三四の天人と共に先導となり、二頭の馬は夫人の寶輦を曳き、馬上の御者は之を調御して居る。迦毘羅城の臣僚は椰子扇、白拂、蓮花等を執つて寶輦に従ふて居る。

第二十八、佛の誕生。

春の初の如月ニツラキ八日鬼宿合するの時、父王善覺長者は摩耶夫人を迎へて俱に共に時恰かも百花爛熳の園林に馳入り給ふた。夫人は苑中の樹蔭から樹蔭に逍遙し一大娑羅樹を見て其美を愛し、樹下に至つて一枝を把らんとせられた。時に枝は菩薩の風力に依つて自ら曲り垂れて夫人に近づいた。夫人は手を伸べて其枝を把り給ふに其美はしさは、み空の虹の如くであつた。此時に夫人は産氣を催し給ひ、女官等は皇后を繞らすに幕を以てして退く。二萬の天女は皇后を圍み十指の掌を合せて共に夫人に向つて頰を讚した。夫人は起立して娑羅樹の枝一つに無憂樹を把りたるまゝに菩薩を生み給ふた。梵天王は金

色の網を以て菩薩を受けて四天王に渡した。四天王は氈鹿の軟皮を以て造つた氈衣の上に菩薩の玉體を捧げた(印度古代の皇子誕生の吉例に則る)。三十二の瑞相は現れ、天地は震動し龍王は天から産湯を吐いた。奉侍の人々は之を四天王より受けて綾帛の上に戴せ奉つた。此時菩薩は自ら地に下つて直立して東面より順次十方を觀察し給ふに、大千世界の人天一つとして菩薩に當るものが無かつた。此に於て菩薩は七歩前進し靜に止り、巖の如き拳を伸べ、妙音を以て「我於世間最尊最勝、此即是我後邊身、盡生老病死即ち天上天下唯我獨尊を大喝獅子吼し給ふた。梵天王白蓋を執り、天帝釋は白拂を把り、諸天は各々手に聖王の什具を捧げて隨從したのである。

聖后摩耶は起立して右手を以て無憂樹の枝を把り、菩薩は右脅より降誕あらせられ、七つの蓮花上を歩み給ふ。龍女は長跪して灌頂の水を捧持して居る。

第二十九、諸天は淨飯王を訪れ、王は婆羅門を供養す。

斯の如く菩薩が本來の圓覺の聖者たる事を啓示し給ふた時、諸天及び多くの仙人は太子を恭禮、頌讚する爲めに來り集ふた。此時も亦三十二の吉瑞は再び現れ光明は輝き、天樂は響き、天華は雨降つた。上流の釋種からは一萬の乙女一萬の仔馬、五千の象、五千の犢等が太子の爲めに贈られた。佳卉珍草園、白檀の森、光輝映い寶石坑は出現した。太子は悉達多と名付けられた(Parvāthasiddha 悉達多とは「一切成就」の意。)國中百庶は求むる處を與へられ、三萬二千の婆羅門は日々供養を受けた。天帝釋、梵天王は婆羅門僧教團に入つて禮讚を誦した。

宮殿中には天人は淨飯王に謁して讚嘆の偈を頌して居る。他の牀上牀下には婆羅門の大施會を示す。

第三十、太子の哺乳。

釋尊降誕後七日、佛陀を懐胎せる聖母摩耶崩して、夫人の妹、摩訶波闍波提(大愛道) Mahāprajāpati は諸釋種の請に由り代りて太子を乳哺養育し給ふた。

姨母大愛道は寶座上に坐して太子を抱き給ふ。庭内樹林には果實豊滿するを見る。

第三章 西南の部

第三十一、仙人の占相。

雪山の麓に阿私陀(Asita)と稱する耆徳が居た。淨飯王は常に彼を崇敬し給ふた。彼は一日天に昇り菩薩の降誕の慶事を聞いて來つて王に謁して釋尊の占相をせん事を請ふた。そして菩薩を抱き上げて「大王よ、太子の形貌殊好、三十二大人の相、極めて明瞭なり。復八十隨形相あり、依つて家に在つて轉輪聖王と作るに合はず、出家して佛陀となり給ふべし」と曰し、又「是れ人中の最尊無上の皇子なり、我齡己に老ひ死期近し、佛陀の聖教を聞く能はず」と長嘆悲泣した。尙、仙人は都城を出で、妹の家に至り、甥那羅迦に對して、「三十五年の後淨飯王の皇子正覺を成じ給ふを待つて、直ちに佛弟子となるべし」

と言ふた。

阿私陀は合掌して太子を看て居る。

第三十二、大自在天の太子讚頌。

淨飯王は阿私陀仙の占相豫言を聞いて、太子に恭禮し諸天聖仙に讚嘆せらるゝ爾は世の醫王なり」と宣ふた。此時に當つて天界に於ては大自在天は諸々の天衆を召集して「菩薩なる大王天界を去り給ひ、生死の國土に降誕し給ふ。今や天界衰頹の色あり吾々諸天も彼の地に參り太子を頌し奉らざるべからず」と稱した。大衆は降天、菩薩に長跪合掌右繞數百匝して「大王よ、太子は大覺世尊となり、人天の師となり給ふべし」と頌へた。

寶座上姨母に抱かれ給ふ太子を合掌するは大自在天である。

第三十三、寺院行啓を議す。

釋種の長老は王に太子の寺院參詣を議奏した。王は勅を下して道路を平坦にし、綠門幡幢を以て飾り、途上諸々の汚穢を去り、老病貧窶の民を排除し、

至る處に音楽を響かしむる様に命じ給ふた。尙ほ王は釋種貴族の隨從を命じて婦女は車駕男子は騎歩、年少紅顏の男女は綺羅星の如く鹵簿に隨從せしめられた。婆羅門僧は讀經の爲めに應召して市中に鐘鼓を鳴り響かせ、香水を盛つた瓶器は到る處に備へ付けられた。此時王は太子の室に入つて姨母大愛道に太子の御服を更へる様に告げ給ふた。

太子は姨母の膝に坐し給ひ、諸延臣は太子の衣服等を捧持して居る。

第三十四、寺院行啓。

太子は更衣の後、笑止に堪ね兼ねて姨母に向ふて「母后よ、我れを何處に伴ひ給ふや」と尋ね給ふた。大愛道は「寺詣でに」と答へられた。太子は笑みて「我が生れし時には三千大千世界は震動し、人天七部衆は稽首恭禮したるに、今我れをして參拜せしめ給ふは如何なる威神にや。我れは天中の天即ち第一義天に住して諸天に秀で獨尊なり。吾れは寧ろ衆生の爲めに慈悲を垂れに出づべし、我れを見る者は總て喜びを得るを以て」と宣ふた。王は諸大臣に圍繞せら

れ太子を珠玉七寶の御輦に坐せしめ給ふた。數萬の天衆は之に供奉した。

鶴駕は天衆朝臣に侍衛せられ、駟馬肅々、鹵簿堂々として、太子は寶輦の中央に坐し給ふ。

第三十五、太子寺前に御着。

寺院に到つて一同下乗、太子が地に歩を下し給ふや、涇婆、那羅延、俱吠羅、月天、蘇利耶、天帝釋、大梵天、並びに守護神に至る迄、諸神像は悉く臺坐から離れ出でて太子の足下に恭順した。此時天地は忽ち光明炳焉として輝いた爲めに隨從の一同は袖衣を以て其顔を覆ふた。同時に迦毘羅城は六種に震動し、天華は兩降り、滿空の音楽は和鳴した。寺内の繪畫の諸神像は生像となつて太子を合唱讚美した。

背光を有する太子は父王の前に起立し、諸神像は殿堂より抜け出で、恭禮合掌して居る。

第三十六、寶冠の奉呈。

一日釋種王家の高僧優陀延は五百の婆羅門を伴ひ來つて、王に謁して太子の爲めに多くの裝飾品を作る事の許可を乞ふた。寶貨玉石を嵌めた耳環、腕環、首環、及び絶美の寶冠の製作なるに及び、請ひを容れて毘摩羅園に於て姨母は之を太子に着け給ふた。併し金具寶冠の赫耀たる光彩も太子の燄明の前には忽ち消れて聚墨の如くになつた。

淨飯王は宮殿寶座に坐し、太子は園内の牀上に居給ふ。多くの釋種等は寶冠金具を捧持して太子に呈して居る。

第三十七、太子の入學。

太子七歳に達した時、父王は國中に令して學問諸藝に精通する婆羅門を請じて其師とし給ひ、又他の五百の釋種兒童と共に通學せしめられた。天人は道に天華を散じて先導し、父王も亦之に同伴し給ふた。學堂に入り師匠選友に對し給ふや彼は忽ち地に跪坐して太子の身より發する光燄を避けた。天人は選友の手を把つて引き起し、自らは空中に昇つて天華を菩薩に雨降らし、

讚頌を唱へて消え失せた。

天蓋背光を着け給ふ太子は起立し、學者選友は跪いて合掌禮拜して居る。

第三十八、學童時代の太子。

王は又太子の爲めに學堂を起し、七堂を以て莊嚴し、牀榻學具等を極めて精麗ならしめ、多くの釋種の兒童と共に修業せしめられた。太子は穎悟聰明凡そ諸の技藝、典籍の議論、天文地理、算數射御等皆な悉く自然に之を知つて居られた。

圖は太子が五百の釋種の學童と共に阿伊優啞鳴アイウエオを習ひ給ふ(此阿伊優啞鳴は梵語の字母である)。太子の學友等は貝多羅葉を手にして列坐して居る。

第三十九、耕祭行啓。

太子書論を経て讀方を學び給ふに當つて、童子等が阿と發音する時は太子の金口よりは「諸行無常」と響き、彼等が伊と唱へる時は「自他利益」と聞けた。斯くして太子の一言一句は學童等の爲めには他日大法の眞實義を解得する準備

となつた。又一日淨飯王耕祭を営み、國王は金鍬を執り、諸臣は銀鍬を把つて耕作の式を行ひ給ふた。農園中の閻浮樹下の涼蔭に太子の座牀を置いた。太子の侍女は其盛典を見んとして繞らされた幕外に出で去つた。周りに人無きを見て太子は直ちに結跏趺座して靜觀を爲られた。侍女等が歸り見るに、爾餘の諸樹の蔭は消へ居るに獨り此美はしい閻浮樹の蔭のみが残つて居た。殊に幕内には太子が靜觀し給ふを見て更らに不思議の念に堪へずして直ちに之を王に奏した。王は馳せて太子の側に至つて太子に禮して「愛子よ、是にて我れが汝を禮する事再度なり」と宜ふた。太子は農夫勞役して租税を負擔し、耕牛は涎を垂れて喘ぎ、諸鳥が來つて蟲族を食ふのを見て慈悲心を起し、世間苦を哀嗟して、諸の欲惡有覺有觀を離れて、即ち離苦の法を深く思惟し給ふたのである。

太子寶輦に坐し鹵簿堂々式典に臨み給ふ。

第四十、閻浮樹下の太子。

太子此鮮榮愛すべき樹下に於て初禪に入り給ふた時、五通の仙人は虛に乗つて、南から北に往つた。此閻浮樹上に至つた時、彼等は遽に神通力を失ひ、飛行する事が出来無くなつた。「須彌山の最高峯も乾闥婆の國土迄も飛遊せる吾等が通力を失へるは何事なるか」と驚ろいた。此時に於て森林の神は現はれて、「御身等の超自然力も此所に於ては無効なり、彼の閻浮樹蔭に釋迦太子あり」と告げた。仙人等は光明莊嚴なる太子を望んで、頌歌を讚唱しつゝ下降して、恭禮右繞三匝して再び空中に飛翔し去つた。

天人は空中に頌讚合掌し、五仙は長跪合掌禮拜して居る。

第四十一、太子納妃を議す。

太子漸く長じて德貌日に新であつた。釋種の長老大臣は王の宮殿に集り議し、王に太子出生當時の占人の豫言を想起せしめて「太子出家せば心すや無上正覺を成じ、人天三界の師表とならむ。又若し長じて國政に當らんか。聖明の大王となりて普く世界の主となるべく、幾多の皇子を持たるべし。皇子等

は悉く勇敢にして英雄となり他を征し、太子は遂に干戈誅畧に訴へずして四海を平定し給ふべし。又太子は數百の姝女宮嬪に圍繞せられて地上の快樂に耽り、捨城沙門となり給ふ事無く王家の血統萬世一系ならん」と曰した。王は「宣なる哉、然らば太子に容るべき妃を誰とかなす」と問ひ給ふた。五百の諸釋種族は各唱へて、「我が女太子の爲めに妃と作すに堪へん」と奏した。王は種々の雜寶を作り、太子をして之を諸釋女に施さしめ、果して太子の眞意が誰の邊にあるかを密に觀察し、即ち娉して妃となさんと思惟せられた。そして迦毘羅城に於て鐸を振り「今より七日の後に、我が太子、一切の釋種の諸女を見んと欲す、期日に於て悉く我が宮門に來集すべし」と、唱へ玉ふた。

釋種は淨飯王の殿堂に詣で、太子妃の撰擇を評議し、有髻の婆羅門は王と對話して居る。

第四十二、耶輸陀羅姫の引見。

第七日に至り太子先づ出で、宮門前に在つて、筌蹄に據り坐を占め釋種の

少女等の來るを見て、種々の寶器を持つて諸女に施與せられた。四方より來つて太子を見る者は、太子の威徳が大なる爲めに太子を正しく看る事が出來ずして、唯寶器のみを取つて皆低頭して速に過ぎ去つた。最後に其寶器が盡きた時に當つて、一婆私吒族の釋種大臣摩訶那摩(一つに提婆陀訶城主善覺のprabuddha)の女、耶輸陀羅(Yagodhara)が衆多の侍從婢女に傳づかれ來り、太子に近づいて恰も舊知の様で、少しも愧づる色は無かつた。此時太子は乙女に告げて「汝の來るや遅し、皆盡く施し終れり」と宣ひ、指邊に著けて居られた價千金の一印環を脱して與へ給ふた。

太子は牀上に坐して印環を把つて渡し給ふて、耶輸陀羅は跪いて之を受け、て居られる。其背後には多くの婢媵侍衛は坐し、又屋上には瑞鳥は舞ひ遊んで居る。

第四十三、淨飯王と太子の問答。

王の遣はされた密使は趨せ歸つて、「大王、當に知るべし、釋種大臣摩訶那

摩の女、最後に來つて、太子と共に數番の問答あり、太子彼女俱に悦び、此の答對に四目相當ると白した。是に於て王は國師婆羅門を招き、摩訶那摩の家に赴いて、耶輸陀羅を娉せしめ給ふた。摩訶那摩は僧を遣はして我が家相承の古法として、若し戰術技能一切に勝る者あらば、女を嫁せん、諸藝に秀づる能はざる羸弱の青年に對しては之を與ふるを得ずと答へた。王は其侮辱に對して深き悲痛の思ひに沈み給ふた。太子は王を慰めて、「父王、國內に於て吾れに並ぶべき釋種あらば召さるべし、吾は學問武藝總ての競技に於て正に御前に優勝すべし」と謂はれた。之を聞いて王は悦んで諸の競技の催しを命じ給ふた。

王と太子は寶座上に對話し給ひ、諸臣は外に侍衛して居る。

第四十四、擲象の競技。

是より第七日に至つて、淨飯王は釋種の諸童子を集めて、衆技を競はしめ給ふた。其種目は速筆、暗算、弓術、劍術、馬術、相撲、擲象の七種であつ

た。王は大白象を擬して太子の乗用の爲めに城内より出でしめられた。是の時丁度城外より入り來つた提婆達多童子は、此白象を見て、人に問ふて「此象は誰の許に、何處に往かんと欲するや」と言ふた。「悉達太子將に城内に入らんとす、故に其乗用として太子を迎へんとす」と答へた。我慢、嫉妬強い提婆は、彼の象の前に至つて、左手を以て象鼻を執り、右手を以て額を撃つた。白象は一たびは地に倒れ、宛轉三市して遂に絶命した。

提婆達多は足を擧げ、手を振り翳して白象を撃たんとして居る。

第四十五、太子城濠外に象を擲ぐ。

提婆達多過ぎて後に難陀が相續いて來つて、城内に入らんとした。白象の大身が城門を塞いで衆人の往來の妨げを爲して居るのを見て、「誰か是の事をなすと問ふた。諸人は提婆此大白象を殺生すと答へた。難陀は右手を以て彼の象の尾を執り、門を離るゝ事七歩の地に牽いた。此後に太子が入り來られて、此様を見て行人に其次第を借問し、此の象、身甚だ大にして、後に壞爛し、

此の城を臭熏すとして左手を以て象を擧げ、右手を以て承けて擲げ給ふに、七重の牆を越へ、七重の塹を度つて、城を離るゝ事一拘盧舍であつた。此象の墜落の處に大きな穴を生じた、今尙ほ此地をHastigaria(象の穴)と呼んで居る。壁面には數多の従者の行列と寶車の車輪を看得るのみである。西洋諸學者の唱ふる如く、之が果して擲象の圖面なるや否や疑問である。

第四十六、算數の競技。

第二の競技は計算であつた。大數學者關刺樹那 Arjuna は審判役を拜命した。太子の提出せられた問題に對して大衆は腦漿を搾つたが、諸釋種等の難問は總て太子の易々として解き給ふ處となつた。審判 Arjuna は太子の頭腦を驚き讚して、「大智海」と稱した。淨飯王は太子を數聖 Arjuna と競技せしめ給ふた。遂に須彌山の部分や恒河の砂の數の計算法等の問題も太子は瞬時に答解せられた。

中央牀上に坐し給ふは太子であつて、隣れる臺上に居並ぶは釋種童子等で

あらう。別の牀上に宮女等に傳かれて樂坐し給ふは淨飯王と見るべきである。此圖面も幾分疑問に屬して居る。

第四十七、四十八。

此二壁面に付いては泰西諸學者は説明を附して居らぬ。此大塔の建設者が果して之を競技の畫面として挿入したか否か了解に苦しむのである。第四十六、四十七、四十八は圖中の人物光景殆んど同様であつて、物語の繼續せるものである事は明瞭である。之等も亦後日論じ得る機會がある事と惟ふ。

第四十九、弓術の競技。

弓術の競技に於ては、阿難陀は二拘盧舍の距離より射て二鐵鼓を通し、提婆達多は四拘盧舍より四鐵鼓を射透し、孫陀羅難陀は六拘盧舍より六鐵鼓を射貫き、執杖大臣は八拘盧舍より八鐵鼓を通した。そして之を限度に誰も皆之を越ゆる事が出來無かつた。時に太子が出て弓を引かんとせられたが弓及び弦は一時に俱に斷られた。太子が願て更に良弓を求め給ふのを見て、王は

非常に歡喜して先王弓あり、天廟に藏し、常に香華を以て供養す。其弓勁強にして、人能く張ることなしと言はれた。太子は「試に人を遣し將來し給へ」と宣ふた。弓は先づ諸釋種童兒等に授けられたが誰一人之を能く張る者は無かつた。太子は之を執つて弦を控へて射給ふに、十拘盧舍の距離より鐵鼓及び七鑄猪並びに七鐵多羅樹を悉く貫達し箭は地に没した。

圖中左方に七鐵多羅樹を看取る。諸童子は或は弓を張り或は箭を放つて居る。中央傘下に太子は弓箭を把つて立ち給ひ、父王は右方臺上に之を觀覽して居られる。

第五十、太子の結婚。

大臣摩訶那摩は太子が諸少年と競技し給ふて、一切の技藝に於て勝妙であり、智能が最も上首であるのを見て、「願くは我が女を納れて妃となし給へ」と願ふた。是に於て、良善の日、吉宿の時を占して、大王の勢を持ち、大王の威を以つて迎へ納れられた。耶輸陀羅姫は諸の瓔珞を以て其身を莊嚴し、太

子は五百の姝女を隨へて自ら往つて姫を迎へて宮に入り給ひ、共に相娛樂して、五欲の樂を受けられた。

太子は寶牀に坐し、耶輸陀羅姫は之を合掌恭禮して居られる。

第五十一、太子の結婚生活。

姫は夙に賢明婉淑、當代一人の聲高く、春花の姿、秋月の粧ひ、三千の宮女をして顔色無からしめた。依つて太子の鍾愛斜ならず、連理同枝の情交、世に淺からず見わた。又太子は釋迦族の古習に隨ひ、幾百千の姝妓に圍繞せられて滿春の行樂を享け給ふた。

太子は寶牀に坐し給ひ、妃は婢に據つて起つて居られる。

第五十二、諸天は太子の後宮を訪ふ。

樓上閣下不斷の妙樂は奏でられた。天人八部衆は太子を訪れ、恭禮して偈を頌し、美妃宮嬪に交つて清歌妙舞し、以て太子に娛樂を献じた。斯の如く太子は現世の榮耀、人間一切の快樂を悉く一身に萃め給ふも内心常に宇宙の

大法を静慮し給ひ、左右に侍する螻首蛾眉を顧みて悲哀の人生觀を解き給ふた。十方の諸菩薩は太子の所に至つて、其利生の前生を讚美頌歌した。仙人等も亦來つて之に和同合唱した。

清淨の一宮の裏に聲色左右に侍し、太子正に地上に於て得らるべき最上の逸樂を享け給ふ處の華かなる圖面である。

第五十三、天帝釋の勸請。

太子青春宮闕裡に口體聲色の美を享けながら、快々として心樂します、竊に人生の眞義を思ひ、夜半寂として靜なる頃、幾度か三昧靜觀して古佛を想念し、拔苦與樂の法を願求し給ふた。遂に群萌を苦惱より救濟する唯一の道は捨家して沙門となり大法を宣布するの外無しとの深き信念を得られた。太子驟然發心し給ふや、曉天に天帝釋は三十二の天衆を率ゐて降下し、強き頌歌を合唱して、太子の大菩提發心を直ちに決行し給ふ様に勸請した。

太子は寶座に、姫媵は座下に、衛兵は殿外にゐる。三十三の諸天等は空中

より合掌して發菩提し給へる太子を恭禮讚頌して居る。

第五十四、三時殿。

諸天が、太子に出家の決心を鞏固ならしめる爲めに勸請して居る時に當つて、淨飯王は太子が夜半竊に多くの天衆に圍繞せられて捨宮出城し、茶褐の僧衣を身に纏ひ給へる托鉢姿を夢に見られた。目覺めて後も憂慮に堪わられず、自ら太子の宮殿に到つて種々と諭された。其上更に現世の榮耀を楽しましてしめんとして、地を風色絶佳の處にトし、夏季殿、冬季殿、雨季殿の三時殿を建立し、温涼四時に適せしめ、侍らしむるに多くの宮嬪を以てし、百態の媚を呈せしめ、凡ゆる地上の快樂を以て太子の深き冥想に耽るを礙げしめられた。尙ほ宮殿の階段上には五百の衛兵を奉仕せしめて太子の出離に備へ玉ふた。

太子宮に於ては美姬太子に媚を呈し、宮女殿に於ては姦女等紛黛を裝ふて居る。

第五十五、太子の警護を嚴にす。

王は占者の言を容れて城門を改築し、門扉一枚を開くに五百の兵隊を要せしめ、東西南北の四門には各々五百の釋種勇者と五百の兵車を備へて警護を嚴にせられた。又宮苑には蘇油香燈蠟燭を限り無く點じて環視し、學才優れた優陀夷は常に太子の左右に侍して種々の手段を以て諷し、努めて太子の心を奪はんとして姦女等をして百態の媚を競はしめた。

太子は傍らに美妃耶輸陀羅を擁し、種々の姿態を凝せる姦妓に圍繞せられ玉ふ。衛兵は殿外に侍衛して居る。

第五十六、老人を見玉ふ。(四門出遊の一)

太子憂鬱沈思し給ふ事愈々甚しくて、遂に月は盈罅し、四時は代謝す。斯の如き青春の妙樂夫れ獨り人生にある乎。否々然らず、老病死の三苦の中に累世流轉して其窮極する處を知らずして徒らに此中に嘻戲す。人は果して此の如くにして可なるべきと思惟し玉ひ、先づ宮闕を出で、世相の萬狀を見、

人生の眞諦に接觸せむとせられた。父王は、之を聽許せられて、豫め途上汎百の汚穢を去り、老病貧窶、いやしくも多感の太子の哀情を動かすの恐あるものを一切排除し、珠玉七寶の御車を調へて先づ東門より出でしめられた。此時淨居天は、今悉達太子發悟の時到れり。我等化現を示さん」とて一老人と化した。太子之を見て驚き怪んで、彼の白頭にして蹠踉として歩むは何人となすと問はれた。「是昔は紅顔の美少年、青春の頃嘻々として五慾を恣にせしも今や老衰死に瀕し悲愁のみ多く歡樂少し」と御者は答へた。「世法此の難あり、一切衆生皆な斯の患あり、人命流るが如く、宿夜逝きて再び還らず、老も亦然り、何ぞ世上の歡樂に愛着の違あらんや」と太子は慄然とて震ふて、早晚到るべき此老衰の憂苦を長嘆し急遽宮に還られた。

太子の駟馬肅々、鹵簿堂々と行く中路に、童子の曳く杖を支へて羸歩する腰の曲つた一老人を見る。

第五十七、病者を見玉ふ。(四門出遊の二)

太子を慰むべき遊行が却つて憂愁の種となつた事を聞いて、父王は愈々沿道鹵簿を莊嚴盛大にして、再び園林に赴かしめられた。此度も亦遠近の邑城平生太子の盛名を慕ふて居る者は此盛儀を拜觀すべく長路をさし挟んで群集した。時に太子は圖らずも樹下に休息せる一病者を見られた。其身瘦せ腹大に、喘息呻吟し、肉落ち骨秀で、顔色憔悴、自ら立つ能はざるを見て「是を何人となす、何ぞ常人と斯の如く異なる」と問はれた。「是病者にして大苦聚し、世人皆然らざる無けれど平生歡樂して之が爲めの覺悟無し」と御者は答へた。「世間の愚癡無識なる哉、病患の至るや豫め其期を定めず、今日の香閨の人明朝安ぞ枯骨たらざるを保すべき、何んぞ漫然世榮を追ふ違ある」と直ちに車を廻らして愴惶還城し給ふた。

御者は太子を恭禮して太子の問ひに答へて居る。病者は一樹の下に痛々しき身を起し、手を額にして太子を拜して居る。

第五十八、死者を見玉ふ。(四門出遊の三)

曩の東西二門の出遊に於て太子の愛情を益々加へたるを聞いて、父王は深く軫念し、愈々供奉を正し街衢を裝飾せしめられた。然るに怪しむべし。忽然として一つの死者を四人で擔ふた一輿が太子の車駕の前に現れた。其屍上に香華を散じ幾多の家人が慟哭して其後に從ふて居るのを見て、太子は優陀夷を顧みて問はれた。優陀夷は「此人は世に在つて五欲に貪着し錢財を愛惜し、辛苦經營、唯積聚を知つて無常を識らず。今や諸根壞れて生命絶し、父母親戚眷屬の愛念する所となる。然れ共命終の後は草木の如くにて、恩情好悪は相關せず。誠に死者は哀む可し」と答へた。之を聞いて太子は深く感動して、低聲に謂ふて「世間此苦あり、世人は何んぞ此中に在つて放逸を行ひ、無心なる事石木の如くにて怖畏せざるにや」と震摺せられた。是に於て太子は斷然出家して深く學理を究め、老病死の如き痛苦を抜かんと念願し、疾驅して還城し給ふた。

寶車上の太子は喟然として死者を見玉ひ、死人の親近は死屍に取り縋つて

憂へ哭いて居る。

第五十九、清僧を見玉ふ。(四門出遊の四)

父王は太子の憂愁を翻すべき道を羣臣に諮ひ給ふた。併し何れも矢張五慾を以て其心を留むるを唯一の方法と答へた。依つて此度も亦北門より寶車を馳つて臣佐を従へて園林遊觀に出でしめられた。途中一沙門に會ふて、其諸根寂定、威儀法に適ひ、衣服整齊、手に法器を執つて居るのを見て、復問はれた。御者は「之を比丘となす」と答へて出家の利益を説いた。之を聞いて太子は喜んで園林に入られた。此所にては王の旨を受けて數百の宮女來り迎へ、種々の姿態を盡し、競ふて太子に媚を献じた。憂陀夷は昔大仙人の成覺も、孫陀利姫の愛慾に墮し、毘戸婆梵仙の一萬年の修道も、天妃の爲めに一日にして破碎せられたるに非ずや、太子學識高く常に幽玄の沈思に耽ると雖も争で御身等の如き女性傾國の一笑に敵し得べきと稱して、秘術を盡し太子の道念を動かしめんと努めしめた。併し太子の心は大磐石の如く寂定として深淵



技競の術弓 (49)



ふ給見を人病二其遊出門四 (57)



眠熟の女妹 (63)

の静を保ち、豊麗無比の玉殿も空塚の如く、天の樂園にも似たる園林も墓域の如く觀じて、却つて「人生朝露の身を以つて何故に三大苦に對して怠れる！」と太子は説き玉ふた。

太子寶車に坐して、比丘の立つて右手を舉げ左手を垂れた、其清齊たる姿を見て居られる。

第六十、耶輸陀羅姫の惡夢。

淨飯王は四門出遊以來、太子の無常觀愈々深く厭世出家の日の遠からざるを知られた。依つて斯くては迦毘羅城の一大災厄なりと、百方出城を防遏し、衛兵監視を嚴にせられた。又一切の歡樂を盡して思念の遑無からしめ、先の出遊の事を忘れしむる様に努められた。一夜耶輸陀羅は大千世界は震ひ、諸山は動搖、樹木は倒潰、日月星晨は地に墮ち、姫の寶冠は脱落、毛髮は混亂して頸に巻き、手足は切斷、寢臺は柱折れ、身は裸體となつて地に投せられ、王の幡蓋は裂け、太子の裝飾は散亂し、太洋は狂亂、須彌山さへも其麓から

震動する夢を見られた。姫は驚き目覺めて太子に之を告げられた。太子は靜に姫を慰籍して、「其夢は吉祥の前兆なり。積徳の光明を身に負ふ者のみ斯の如き瑞夢を見得るなり」と謂はれた。

太子は諸の宮女に物語り玉ふ。太子妃が何れであるか圖中不分明である。

第四章 西北の部

第六十一、深夜太子父王を訪れ玉ふ。

太子は老病死の三苦を惟ふて茲に出城の決心を愈々堅固にして、中夜父王の寢殿を訪はれた。廷臣及び父王は太子の出現により樹々城壁に時ならぬ陰影を投ずるを見て驚ろいた。太子は王に謁し、「一切世間の中生者必滅會者定離なり、此故に我れ今より出家して眞の解脱を求め、一切衆生を煩惱より救濟せんと欲す。父王希はくは我が願を許させ給へ」と本願を吐露して哀願せられた。父王は戰慄太子の手に絶り、涙を流して「悉達多よ、希くは其所思を翻せ、

卿は年齒尙ほ少なり、其考へ動搖し易く、假令苦行を修すと雖も徹底寂滅境に到る事無からむ。我れの如き老境を待つて身を出家成道に委ぬるも遅しとせず。今や迦毘羅城の四隣列強相喰む。卿は國政を執り世法に従ふべし。願はくば又再び出家の事を語る勿れ」と諫止せられた。太子其哀情を察して感泣せられたが、恭敬懇懃に「父王よ、世に若し老病死の患なく、無量壽を保有し得ば永く出家を思ひ止まらん、此四願にして不可能ならんには一迦毘羅城の榮華より全法界の濟度更に大なり何卒我が願を容れさせ給へ」又「此四種の願ひ叶はずば一願にて足れり」と曰はれた。父王は之を聞いて愛着の心稍薄らぎ、一切衆生の爲めに出家するを許された。

殿中には父王と太子は各々其願ひを述べて居られる。牀下には宿衛は假寐して居る。

第六十二、太子の警衛を愈々嚴にす。

淨飯王は凡ての言辭の無益なるを悟つて太子の出家を許された。併し一方

曩に占相せる婆羅門の豫言を追想し、益々歡樂世榮の極を盡して太子を慰藉し、親族及び諸釋種を召して四城門、四街衢の警護巡邏を愈々嚴重にせられた。姨母摩訶波闍提も亦宮中の諸姝女を集めて終夜妙樂を奏せしめ、一方警戒に當らしめられた。太子の伯父摩訶那摩は諸兵を督して巡察し、又市民を一人も眠らしめなかつた。太子妃耶輸陀羅は多數の乙女に二本の槍を携へしめ太子の寢殿寶牀の周圍に侍らせしめられた。

太子の四圍には妃嬪姝女は凡ての媚を捧げ、殿上閣下には物々敷い警護の衛士は侍つて居る。

第六十三、姝女の熟寐。

婉美天女の如き姝女は太子を圍繞して、妙樂歌舞を献すと雖も太子の心寂靜、凡ゆる巧妙は太子を動かすに足らずして、太子は覺へず眠られた。淨居天の降下し始むると共に姝女等は我等は太子の爲に舞樂を献す、太子眠らせ給ふ上は何んぞ之を爲すに足らんと相謂ふて皆眠り臥し、香油の燈火獨り明

かであつた。夜半太子覺めて先の婉麗なりし諸女を見るに、其美容は變壞して千姿萬狀見るに堪へぬ醜態であつた。太子は撫然として一切是れ害惡、我れ之に堪へずと稱し、決然出城斷行を思はれ、姝女の醜態の中を塚間を行くが如き思ひして出られた。

太子寶牀上に踟躕して、姝女等の容儀亂れて醜穢見るに堪へざる、女子の本性を正觀し給ふ。

第六十四、太子は車匿をして健歩に馬装せしめ給ふ。

淨居天は太子に其時到れるを告げた。太子は宮殿を出で、地上に下つて合掌諸佛を至心に念せられた。提頭頼吒天王は乾闥婆等、一切の眷屬百千萬を従へて、音樂を奏しつゝ東方から來つて城を三市し、地に下つて太子を合掌禮拜した。毘留勒叉天王は鳩槃荼を率ゐて香湯を盛つた寶瓶を執つて南方から來た。毘留博叉天王は龍を従へて香雲華雲寶雲に乗じ、香風を起して眞珠を持つて西方から來た。毘沙門天王は夜叉を率ゐ、鎧甲を着け、弓箭刀槊戟

を執り、火珠火炬を把つて北方から來た。天主釋提桓因は一切の眷屬百千萬を率ゐ、華鬘末香旛幢寶蓋瓔珞を持つて、三十三天から降つて、各城を三市して太子を禮拜した。諸天眷屬が四方虚空を守護して居る時に鬼星は月と合した。此時諸天は大聖太子よ、鬼宿己に合す、勝法を求めんと欲せば此所に住する勿れ。人王師子よ、時到れり、速疾に捨宮出家すべしと大音聲に呼んだ。太子は自らと同日に生れた御者車匿しゃやくに命じて、人知れぬ様に、是も亦同日に生れた白馬かんたか韃陟に馬具を置かせ玉ふた。蓮臺に太子は立たれ、車匿は跪いて太子を禮拜し、韃陟は其後に立つて居る。諸天は之を讚頌恭禮して居る。城中に衛兵は熟寐して居る。

第六十五、太子の踰城。

車匿が命を受けて、馬を裝する時、太子は耶輸陀羅姫の寢室に往つて、密に其戸を開かれた。香油の燈火は稍々暗き室内に、妃は寶牀に安臥して玉手を羅睺羅の頭上に置いて眠つて居られた。太子は、愛子を取つて抱けば妃必ず

覺め、我が捨宮を妨げん、先づ正覺を成じて後歸り來り愛子を見るべしと思惟して宮殿を出で去られた。此時羅睺羅は生後七日であつた。太子は直ちに韃陟に跨つて、汝今夜我れを救へ、我汝の助力に由つて成佛せば、即ち人天を救ふべしと言はれた。韃陟は長さ十八肘高さ又之と等しく、全身純白、體勢は龍の如く、強健能く馳せて、其走る時の蹄聲は全都に響いた。故に一步一步に天人は馬脚を受けて其響を妨げた。夜半都城の大門に達せられた時、天人等は既に門に在つて直ちに之を開いた。爲めに其朝夕の開閉の音四十里に聞ゆる重鐵門も音無くして通り得た。是に於て太子儲位を棄て、阿沙佉月滿月の夜、遂に迦毘羅城を出で玉ふた。時に御年二十九歳であつた。

太子は靈馬韃陟の背に跨り、天人は馬脚を蓮臺を以つて受け、諸天の大衆は寶器を取り或は合掌しつゝ馳奔して居る。韃陟の尾を執るは車匿である。第六十六、太子諸天の守護を思ひ給ふ。

太子は曉迄に六由旬を過ぎ、阿奴摩川畔にある、往古仙人の苦行した林中

に到着して、諸天の護持に由つて容易に出城し得たる事を想はれた。そして馬背から下り車匿を慰諭して、『汝の真情勤勞共に奇特とす。宮中に還り大王に奏上して、我れは世間の財位封祿は希求する處に非ず、唯だ一切衆生正路に迷ひ生死に轉流するを見て救濟せんが爲めに出家す、唯願はくは憂慮を生じ玉ふ勿れ』と復命すべし』と謂ふて、大王に摩尼寶、姨母摩訶波闍提に瓔珞を持ち歸らしめ、妃耶輸陀羅には諸の裝飾を贈つて、人生の哀別離苦を斷せんとして出家して道を學ぶ、戀着を以つて憂愁を生ずる勿れ』と言はしめ、其他宮中諸姝女、釋種同學童子等に悉く別れを告げしめられた。車匿は之を聞いて悲泣して大地に身を投じ、聲を擧げて哭した。韃陟も頭を低くして、前に雙脚を屈して太子の足を舐め、落涙して悲鳴した。

太子は諸天衆に奉仕せられて蓮臺上に立たせ給ふ。韃陟は太子を顧みて離別を惜み、車匿は悄然として之を牽ゐて居る。

第六十七、太子の剃髮落飾。

太子は、鬚髮を剃除せずんば出家の法に非すと宣ふて、車匿から摩尼劍を把つて自ら剃髮し、『我れ若し成佛すべくんば空中に留らん、然らすんば地上に落ちん』と言ふて之を空中に擲げられた。天帝釋は此希有の事を見て大いに歡喜して天衣を以て之を空中に於て受け、三十三天に持ち還へり供養禮拜した。此時太子の頭髮は長さ二吋となり、右旋して頭上に密着した。(此の頭髮の長さは佛陀生存の間常に異なる事なく、鬚髯も亦同様であつた。故に之より以後鬚髮を剃るを要せ無かつた)

太子は中央の蓮台上に立つて、寶劍を把つて鬚髮を自ら斷つて居られる。車匿は跪いて寶冠及び寶劍の鞘を捧げて居る。天帝釋は空中に天衣を持して飛翔し、諸天は恭禮奉仕して居る。周圍の樹草は苦行林なる事を表現して居る。

第六十八、淨居天は法衣を捧ぐ。

太子鬚髮を剃り、尙ほ寶衣を著玉へるを見て、出家の服當に是の如くなるべ

からすと曰ふた。此時淨居天は獵師と化して、身に袈裟を著け、手に弓箭を
持つて太子の前に黙然として留まつた。太子は獵師に「汝の着くる所は乃ち是
れ往古諸佛の服なり。何んぞ之を着けて罪を爲すや。汝若し此袈裟を與ふれ
ば、我れ當に汝に橋奢耶衣を與ふべし」と謂はれた。獵師は袈裟を脱いで太子
に提した。時に瓶子と名づくる天使は、太子に出家の八什具（三衣、乞鉢、剃
刀、針、帶、雨衣）を捧げた。此に於て太子は羅漢の貌を整へ、出家の法服
を着し、車匿に命じて父王母后に其安全を報せしめられた。車匿は昨日の榮
華の太子が今日は孤榮の沙門となり給へるを見て涕泣久しうした。遂に共に
止つて修道せんことを切願すれども許されず。恭敬頂禮して迦毘羅に還城し
た。

太子淨居天の捧ぐる袈裟を受け給ふ。諸天は傍らに奉仕して居る。

第六十九、諸天太子を讚美祝福す。

諸天は太子の橋奢耶の寶衣を捧持して昇天した。此光景を望見した諸天は

參集して、年若き太子は沙門となれりと頌歌を讚美した。其響は諸天界に鳴り
渡り色究竟天に迄達した。一方車匿漸く迦毘羅城に歸るや、城中大小の居人
唯だ車匿のみにて太子の共に在らざるを見て、皆な並び其後に隨ひ、悉達太子
今何所に在ると問ふた。「太子今、五欲を棄捨し、獨り山林に居る」と答へた。
人々各相視て皆謂ふ、「我等當に太子に隨ひ、去つて山林に住すべし」と稱し、
滿城寂漠、唯々歎歎の聲を聞いた。車匿は韃陟を牽き、宮門に入らんとする
時、姨母妃妹女争ふて宮門に迎へ、車匿のみにて太子の無きを見て、姨母は
啼哭して「我が子の頭髮今何處にかある」と問はれた。車匿は「太子、我が母を再拜
し懇懃に勸請し憂念を生せしむ莫れ——」と宣へり」と答へた。時に妃は哀哭し
て車匿を責めて、車匿、太子去るの時、我れ彼の夜、睡眠して覺らず、汝太子
を送りて何處に在りしや」と謂はれた。時に淨飯王哀哭の聲を聞いて蒼皇居室
を出で玉ふた。是の時、車匿は寶冠、珠璣、繖蓋を齎らして、王の前に至つ
て、一々具陳し、頭面を以て禮拜を作した。淨飯王は聞いて號哭せられた。

右方の林中には獸類の遊ぶあり、又洞穴内には甕器を示して居る。太子の前には衆多の諸天は恭敬頂禮してゐる。

第七十 太子婆羅門尼僧パドマ(Padma)を訪ふ。

車匿、韃陟を還らしめられた太子は、沙門の姿を以て、先づ婆羅門(Śramaṇa)夫人の住所を訪はれた。夫人は厚く太子を迎へ、敬重して饗應した。太子は進んで婆羅門の Padma 夫人の幽居へ向はれた。夫人も亦太子を請じて款待供養した。更に又太子は Paivasa 夫人の隱舎を尋ね、Dattimadani の子の Rajaka の家に行かれ、終に大都城吠舍離に着き給ふた。(普通釋迦傳にては、此所に於て草葉樹皮を衣服とする、數多の瑜伽苦行者の棲む跋伽仙人の深林を問ひ給ふのである)。

太子は蓮台上に立つてパドマと語つて居られる。樹下には多くの婆羅門婦人が修道して居る。

第七十一、阿藍仙人太子を迎ふ。

當時吠舍離には大徳阿藍迦藍仙人が住して、其門弟大衆三百人を有して居た。彼は常に寂滅道を説き、其涅槃とする處は斷滅に有つた。又其生活は貧窮に居る事を主とした。阿藍仙人は遙に太子の來り給ふを望んで、諸弟子に「彼の相好具足せるを見るべし」と稱して、其顔貌端正、諸根恬靜なるに深く感じ、大いに愛敬の念を起して奉迎した。太子は一應の會釋の後、生老病死の四苦の解脱法を問はれた。阿藍仙人は答へて、空閒の處に住して禪定に入り、非想非々想處に至らば諸苦は斷滅せん。之究竟解脱にして、諸學者の彼岸なり」と啓した。

阿藍仙人は立つて、左手に蓮華を把つて太子を迎へて居る。其前には前圖同様に燭火の燃ゆるを見、後方には苦行者を見る。又林中の洞穴には二匹の猿猴を示して居る。

第七十二、阿藍仙人の所に於ける太子。

太子は此所に留つて數論學派の修行をせられた。併し其知見する處は究竟

の所に非ざるを知つて、仙人に向つて、「非想非々想到我ありとせんか、我無しとせんか、若し我無しと言へば非想と云ふべからず。若し我有りと言へば、我には知(意識)ありとするか、知なしとするか。若し知無ければ木石に等しく、若し知あれば則ち攀縁あり。既に攀縁あれば則ち染着あり。染着あれば、則ち解脱に非ず。汝羸結を盡すと思へるも、自ら細結の猶ほ存するを知らず。之を以ての故に究竟に非ず。細結増長して復た下界に生る。此を以ての故に度彼岸に非るを知る。若し能く我及び我想を除けば一切滅盡す。是を以て眞の解脱と爲すべし」と謂はれた。仙人は其深智に驚ろいて默然として、遂に答へ得なかつた。

太子は蓮台上に跌坐して阿藍仙人と對話して居られる。大衆は林中に苦行を積んで居る。

第七十三、太子王舎城を訪ふ。

摩揭陀國の首都王舎城の近く、槃荼婆山 (Pantava) が聳る所に、太子は孤

錫瓢然と來られた。遂に此山を選んで住所と定め、空間の處に獨居せられた。此時に當つて數千萬の天衆は降來して太子を護念した。或る朝太子鐵鉢を持つて、熱湯門を通り市街に入つて托鉢せられた。市民は之を看て「彼を何人となす。梵天なるか、帝釋なるか、毘沙門天なるか。若し然らずんば深山に棲居する神仙なるか」と怪しんだ。そして急いで食を捧げ供養し奉つた。此時國王頻婆娑羅 Bimbisara は、臺閣に立つて之を望見して、托鉢比丘の威容顯耀なるに驚き、侍臣を顧て「汝等此の士を見よ、姿色清淨の梵志にして、動作姿勢正に法に適へり、姿勢法に適ひ、思慮亦深し、思ふに下賤の出に非るべし。使者を馳せて、何處に行くかを問はしめよ」と命せられた。

空中地上に諸天は太子を讚頌し、頻婆娑羅王は王妃と共に臣佐を率ゐて城門を出で來つて居られる。太子の前に跪いて居る婦人は何者なるか不明である。

第七十四、頻婆娑羅の來訪。

王使は聖者に尾行し、王に復命して「陛下、此比丘は槃荼婆山の東側に静座し、貴き虎の如く、山洞の獅子の如し」と奏した。王は之を聞いて、百僚を率ゐる壯麗なる車駕を馳せて、來つて太子の側に座し、互に禮を交へ、恭敬して「足下年少なりと雖も、姿色清淨にして貴き王子の如し。如何んぞ跣足、遠く此所に来りしか。我れ、之を見るを悲しむ。足下若し意あらば、我が國土を中分して封せん、若し少しとせば國土の全部を與へん。尙ほ足らずとせば、當に四兵を給すべし。足下自ら攻伐して他國を取るべきなり」と俗利を勧められた。太子は「我れ出家して悉く世欲を棄つ、欲には苦あり、涅槃は安樂なり。我れ之を觀るが故に、將に修行して以て之に達せん」とす。我希ふ所唯だ是のみ」と説かれた。茲に於て王は太子成道の後、先づ自國に臨んで教化を施し給ふ様に請はれた。太子は懇懃に之を受諾し玉ふた。

頻婆娑羅王は槃荼婆山の太子の隱所に駕を曲げて、太子に恭敬の禮を爲して居られる。幽林には鳥獸が群棲して居る。

第七十五、太子憍陀羅を訪ふ。

王舎城の邊に羅摩の子なりと云ふ一仙人が居た。其名を憍陀羅迦(Udraka)と稱して、七百の弟子を有し、常に非想非々想處を解いて居た。太子は此仙人の處に至つて、一靜處に於て專精修學せられたが、復禪定から起つて「此定を過ぎて更に何の法かある」と問はれた。仙人は「是最勝にして更に餘の法なし」と答へた。太子は容易に其定慧によつて、仙人の法を證し終り、「之正路に非ず、沙門の法に非ず、菩提に非ず、涅槃の法に非ず」と思惟せられて、彼の許を去られた。

太子が阿蘭若(Araṇya)の苦行林に憍陀羅を訪ひ、問答し給ふのである。

第七十六、五釋種の隨從。

太子は此の如く儲位を棄て、出家して、道を求められた爲め、淨飯王は王師大臣を遣はして歸國を勧められた。併し之は返つて太子の成道度生の大決心を愈々堅うするに過ぎなかつた。彼等は其威容凜然として近づくべからず、

又強ゆるに辭なきに及んで、益々深く畏敬の念を起して遂に歸城した。此時に彼等は協議して隨伴の中より聰明にて智慧あり、心意柔軟にして性質忠直なる憍陳如、婆娑波、跋陀梨迦、摩訶那摩、阿濕婆特の五人を選び太子に隨從修行せしめた。普通に之を五賢衆といふて居る。佛初轉法輪の時、最初に佛弟子となつた五比丘は即ち是である。太子は五賢衆を從へて、終に象頭山 (Gaya-sirsa) の麓、尼連禪河 (Nirāṇḍī) の邊の苦行林に留まられた。

太子は金流(尼連禪河)の畔の苦行林内に坐して靜觀を凝して居られる。五比丘は其前に列坐して居る。林中には諸鳥遊戯し、清流には魚族遊泛するを見る事が出来る。

第七十七、尼連禪河畔の太子。

太子は婆羅門諸學者を歴訪し給ふ事一年に及ばれた。併し皆何れも眞正の解脱方法では無かつた。依つて尼連禪河畔、優婁頻婁 (Uruvilva) の苦行林に入つて五賢衆と共に靜座思惟し、衆生の根機を觀じ、應に六年苦行して以て之を

度すべしと宣ふて、遂に六年の勤苦を積まれた。其間淨心を以て戒を守り、日に一麻一米を食し、或は復た二日乃至七日に一麻米を食ふて、若し乞ふ者あれば亦た以て之に施された。淨飯王は之を聞いて、波闍波提、耶輸陀羅と議し、資糧を辨じて貨車千乘に載せ、車匿に命じて太子に送らしめられた。車匿敕を奉じて太子の所に至つて、太子の形相を見るに、身體瘦虚となり三十二相は爲めに隠れて見るを得なかつた。車匿は頭面を以て太子の足を禮し、地に悶絶し、良や久くして歎歎大王、太子を憶ひ、我を遣はして此千乘を送り、以て太子を餉すと曰した。太子は、我父母に違ひ國土を捨て、遠く此に在り。求むる所は至道にあり。云何んぞ復た此餉を受けんやと言はれた。そして此修行中結跏趺座して風雨塵土を避けず、屈伸俯仰せず、或は電雷霹靂の時と雖も立たず、春夏秋冬默座して諸根を亂し玉ふ事は無かつたのである。

左方臺上には太子跏趺し給ふて、前方林中には五比丘が共に修行して居る。其傍には尼連禪の流を示し、其中に魚族を見る。

第七十八、摩耶夫人太子に見ゆ。

天子等は太子の此形相を見て、噫、悉達太子逝けりと稱し、夫人摩耶に此悲報を傳へた。夫人は天使を従へて尼連禪河畔に下り、太子の足下に伏して哀哭し、太子、汝が藍毘尼園に生れし時は、獨歩する事七歩、此身は是れ最後身なりと尊く宣せり。然るに汝は四方遊行途に其誓願成就するなし。阿私陀仙の「汝佛陀たるべし」と豫言せしは虚偽なりき。嘗て轉輪聖王を悦ばしめたる光明も、今は既に享有するなし。斯くして汝は體達圓滿する事無くして、遂に幽林に枯死せり。嗚呼、誰か我が愛子に再び生氣を與へ得るもの無きか。毛髮亂れ其美は去り、悲痛悶絶せる我れを誰とかなす。托胎十ヶ月、正に金剛石の如く汝を懷き愛みたる母后摩耶なり。汝が我が胸の張り裂くるを知らずやと歎かれた。太子は、母后、悲痛し給ふ勿れ。阿私陀仙の豫言は必然實現せん。假令須彌は搖ぎ、蒼穹の星は落つるとも、我が發願は動する事なし。聽て佛果を證得し圓滿成就して以て、我母後に面謁せんと、諭された。此慰めに

依つて、天の妙樂の響く中を、夫人は再び天上に歸り給ふた。

夫人摩耶は諸天女を従へて降臨し、太子を合掌恭禮して居られる。太子は牀上に跏趺して母後に物語つて居られる。

第七十九、諸天太子を念護す。

太子、苦行の果、枯瘦極に達し、皮骨相連り、血脈悉く現はれ、美はしき金色の皮膚は光澤を失ひ黒色となつた。村民、樵夫、牧童は常に來つて嘲笑し、塵芥に被はれたる彼の吸血鬼を見ずやと稱して、太子に砂土等を投げ付けた。併し斯る間にも諸天は晝夜其周邊を護念した。又淨飯王は日々に使臣を遣して消息を知り給ふた。

蓮臺上には太子苦行し給ひ、林中には諸天衆は加護して居る。尙ほ華果豊麗なるをも見る事が出来る。

第八十、惡魔太子を誘惑せんす。

惡魔波旬 (Pāpīyan) は苦行六年の間、絶わす太子の後にあつて誘惑の機會を

窺ふた。肉落ち骨露はれた太子に近寄り、言葉柔かに「釋迦太子よ、座を立たせ給へ、如何ぞ斯くも身體を苦しめ給ふ。人生は生くるにあり。先づ生くべし。生きて大法を宣説すべし。卿の美しき皮膚は色失せ、其身は今や死に面し給ふに非ずや。禁欲道は苦しく、心の調服は至難なり」と誘ふた。太子は「悪魔よ去るべし。汝の我慾吾れ之を知る。去れ、聽て我れ汝を降伏せしめん」と答へられた。悪魔は直ちに姿を潜め、復讐の謀計を廻らせた。

悪魔は慇懃に太子に禮して、修法の無意味なる事を陳べ、成道の邪魔をして居る。

第八十一、村女の献糜。

太子の苦行を始め給ふた時から十人の優婁頻螺の若い乙女は、日毎に麻米を携へて訪れた。苦行満六年の吠舍佉月の十五日満月の日、村長の女須闍陀(Suhita)善生神前に牛乳を供養せんとして、夙に起きて密林に行き、自ら淨器を取つて乳を容れ、香淨の粳米を雜へ、之を煮て糜となした。此時須闍陀は



城 踰 の 子 太 (65)



糜 獻 の 女 村 (81)



浴 沐 の 子 太 (86)

多くの奇瑞を見て、其婢盈滿(優多羅)を呼び「我れ天恩を蒙り今朝奇瑞の羣集するを見る。汝速に聖所に至り準備を整へよ」と告げた。婢が馳せて大樹の下に至り見るに、太子東面して端座禪思し、光明は顯輝として四邊を照して居た。婢は之樹神の降來供養を待ち給へるものと拜し、馳せ歸つて須闍陀に斯々と曰した。須闍陀は大いに喜んで、金鉢に乳糜を盛り、金蓋を載せ、布帛を以て之を包み、盛装して頭上に鉢を戴き、尼拘律樹下に至つた。そして太子の形相を見て樹神の降臨と信じ、恭く其側に進んで、頭上の金鉢を取つて之を開き、別に華香の薰水を盛つた金鉢を添へて太子の前に止つた。梵天王は嘗めて之を太子に奉つて忽然として消失した。依つて須闍陀は乳糜の金鉢を太子の玉手に載せ、禮拜して「世尊、願はくば我を憐愍して妾の供養を受け給ひ、然る後、無上正覺を成じて佛陀とならせ給へ」と乞ふた。

須闍陀は、金鉢を兩手に捧げて、恭く之を太子に供養し、四人の婢は其後に踞き、一女は尙ほ又後方に蓮華を持つて居る。村長の邸宅は宏壯に表はされ、

太子の背後には苦行林を示して居る。真に劇趣に富んだ圖面である。

第八十二、死者の衣と着更へ給ふ。

太子、澹然、正思惟、春風秋雨、嚴寒酷暑と戦ひ給ふ内に、黄衣袈裟は破れて、皮膚を表はすに至つた。爲めに太子は之を更へんと希はれた。恰度此時、須闍陀の奴隸の一人 *Paṭṭa* が死んだ。人々は死屍を麻布に包み火葬場へ運んだ。襤褸を纏ひ給ふた太子は、身を屈めて死人の衣を取り上げて、之を洗はんとして水を探し求められた。天人は之を見て地を打てば忽ち湛然たる淨水の池は出現した。帝釋天は池畔に岩石を横へ、太子に代つて洗濯せんとしたが、太子之を辯して自ら爲し給ふた。其後自らも六年の污垢を洗滌せんとして此淨水に沐浴せられた。洗浴既に畢つて再び水から出でんとし給ふたが、身體羸瘠し自ら岸に上り給ふ事が出来なかつた。時に天神降り來つて阿斯那樹 (*Asena*) を低く垂れた。爲めに太子は樹枝を案じて攀ちて出る事を得られた。

太子の後には諸天が奉仕し、其一人は金蓋を捧げて居る。須闍陀は跪坐恭敬禮拜して居る。其前には幽邃なる蓮池があつて水禽は戯れ、寶樹には諸鳥が遊んで居る。天衆の背後には苦行林を見る。

第八十三、天人太子に赤衣を献す。

太子は死者の衣を着けられたが、尙ほ一つ赤赤褐色の僧衣を要し給ふた。*Vimalaprabha* と稱する天人は太子に其赤衣を献じた。太子は之を着して尼連禪河畔の空閑の地に立ち歸られた。

天人は赤の僧衣を太子に献じて居る。野象、孔雀等の鳥獸は閑靜なる幽林を樂しみ或は舞ひ遊んで居る。

第八十四、須闍陀の奉仕。

此夜、諸天等は須闍陀を訪ふて、汝の供物を奉献せる聖者は、最早斷食する事なく、營養を攝取し給はん。汝が「妾の供養を受け、圓覺成道し給へかし」と、祈りし切願は將に成就せらべしと教へた。翌朝、須闍陀は一千の牛より乳を

搾り、七度之を煮沸し、乳糜を作らんとして七度奇瑞を見た。須闍陀は婢優多羅をして聖者を迎へしめた。婢は馳せて往つて見るに、東西南北の四方何れの方角にも聖者を見た。優多羅は驚ろいて急ぎ馳せ歸り之を告げた。須闍陀は「我れ今其世尊に供養せん」として此乳粥を作る、汝夙く往きて此處に招じ來るべし」と婢に告げた。太子は其請に應じて須闍陀の邸に入り、恭禮供養せる彼の女の奉仕を受けられた。

太子は須闍陀の宏壯なる邸宅に招せられ、牀上に坐して居られる。須闍陀は鉢を捧げて糜を献じて居る。多くの侍女は供養饗應の具を把り、左端に於ては之を炊焚して居る。

第八十五、太子尼連禪河に赴き給ふ。

太子苦行六年、離欲寂靜、既に真正の解脱の時機到れるを悟られた。遂に座から立つて尼拘律陀樹(Nyagrodha)を右繞し、進んで手に金鉢を執り、禪河の畔に赴かれた。そして鉢は河岸に留めて自らは清流に入らんとし給ふた。

太子は右手に金鉢を提げ、左手には衣端を把つて河岸に起立して居られる。天衆は來つて跪き合掌恭禮して居る。樹木鳥獸は凡て優婁頻螺の苦行林及び尼連禪の河岸の様を示して居る。

第八十六、太子の沐浴。

此時數千の天衆は空中より曼荼羅華を雨降らせた。太子は此光景を眺めて後金流に沐浴し給ふた。諸天は其淨水を掬して、天界に寶塔を造顯する爲めに飛行昇天した。

太子は河上の蓮台に立つて居られる。諸天仙人は天空より天華を散じて居る。河岸には天人等が金流を掬ふて居る。羚羊は華果美はしい林間に棲んで居る。

第八十七、龍女、太子に寶座を献ず。

太子沐浴後河岸に向はんとせられた。龍王(Sagara)の女は水面に浮び出て、太子に壯麗なる寶座を奉獻した。

右方に太子は尼連禪の河上に立つて居られる。龍女は寶座と共に水面に現はれ出て、太子に恭禮してゐる。其の後方に三人の侍女等は手に花を持つて跪いて居る。

第八十八、太子殘餘の乳糜を攝り給ふ。

太子は沐浴の後、聖者の衣を着け、寶座に上り、東面して須闍陀の奉獻した乳糜の殘餘を味ひ給ふた。太子は之より以後は菩提樹下に七々日の靜觀を爲して、正覺を成じ給ふ迄は遂に食を取り給はなかつた。是の如くに乳糜を攝り氣力を恢復し給ふた爲め、今迄隠れて居た三十二大人の相は再び現はるゝに至つた。隨從の五比丘は太子遂に退轉せりとて太子を捨て鹿苑に赴いた。

太子は龍女(龍王の娘)の獻じた寶牀に跏趺し給ひ、龍女は二人の侍女を従へ來つて太子に讚頌して居る。尼連禪の流れには魚族は浮び、河畔の林中には水禽野鳥、其他諸種の動物を見る。

第八十九、太子金鉢を水に投じ給ふ。

太子は寶座に就き糜を味ひ給ふて、金鉢を惜しげ無く尼連禪の水流に投せられた。河底の龍王は愈々太子の成佛し給ふを知つて、忽ち水面に現はれ、其れを受け讚偈を唱へて龍宮へ齋し歸つた。天帝釋は此金鉢を奪はんとして、身を金翅鳥の姿に瘦し、口に電光を咬へ龍王の處へ飛下した。併し其無益なるを知つて化相を改め、慇懃に鉢を龍王に乞ふた。帝釋は遂に之を龍王より受けて飛昇し、帝釋天宮に歸つて寶塔を建立し、月の改まる毎を以て金鉢の祭禮を其天衆に命じた。其寶座も亦龍女が持ち歸つて同様に寶塔を造顯した。右方に於ては太子寶座に坐し、龍王は水上の金鉢を把つて居る。左方に於ては天帝釋は龍王より金鉢を受けんとして居る。其又左方には龍女は宮殿内に於て侍女に傳づかれて居る。

第九十、太子菩提樹下の覺座に進み給ふ。

太子尼連禪に沐浴し、須闍陀の奉糜を味ひ給ふて後、藜林山の菩提樹下の覺座に進ませ給ふた。此所は四望清淨、風色高雅であつて、甘泉は流れ、華

香は馨り、實に天の裝飾になれる一樹の蔭であつた。風雨の女神等は其通路を寶幔を以て蔽ふた。此日誕生の諸兒は凡て此方に頭を向けて居た。須彌山は麓から搖いで太子に禮を成した。諸天は手に蓮華を把つて隨從し、鶉は柔軟なる青草の下に囀鳴した。數萬の仙人は奉仕し、白檀の香木は芳薫を發した。太子は蓮臺上に立ち、諸の神仙は各々手に蓮華を持つて讚頌恭敬し、鶉は草叢の内外に戯れて居る。四圍の樹々は太子に禮拜して居る様である。

第五章 東北の部

第九十一、梵天及び迦梨迦の敬禮。

此日の晩、梵天は諸弟子を集め、彼等に「今菩薩なる太子衆魔を降伏し、無上正覺を成せんとして菩提樹下に赴けり、吾等も亦彼の所に詣でて菩提樹を莊嚴し、敬禮せざるべからず」と唱へた。此の時樹の女神 *Venu, valga, Samanas, Ojo Padi* 等は之を贊助した。太子は師子の如く歩んで進まれ、歩々に大地は震動

た。妙光は身より放たれて、其身光の及ぶ處、世の憂愁悲傷は凡て常暗の國へと逃げ隠れた。又光明は龍王迦梨迦の宮殿を照らした。龍王は其眷屬羣衆を率ゐて浮び出で、太子に恭敬の意を表して幟幢等を献じた。龍王の第一妃 *Suvarnaprabhāsa* は其宮を出て多くの龍婢に傳づかれ、手には美麗なる傘を携へて太子の前に現はれた。

太子は蓮臺上に立つて居られる。右方には梵天等は讚頌し白拂を執り、天蓋を差し懸けて居る。太子の前には龍王は躬を曲げて敬禮し、左方には龍妃等が香華を捧げて居るのを見る事が出来る。頭上の吉祥の樹々は裝飾せられて居る。

第九十二、諸天他の菩提樹を嚴飾す。

太子は菩提樹下の覺座に赴かれた時、自ら心に「過去の諸佛、草蓐に坐して最正覺を成せりと念せられた。此時に丁度途に樵草人吉祥 (*Prasanna*) なる者が柔軟整齊、恰も天衣の如き青草を茹つて居るのを見給ふた。太子は吉祥に近

づいて、慈心を以て「吾れ草を得んと欲す、吉祥我れに其功祚 (Karma) を與へよ、當に衆魔を伏して無上覺を成すべし」と宣ふた。吉祥は歡喜踊躍して軟草八束を奉つた。太子は之を受けて覺座に敷き靜觀を凝し所謂法樂に入り給ふた。此の時諸天は更に二十八本の菩提樹を美麗に莊嚴し、其下には各々蓮華の玉座を据わた。又其周圍には衆多の寶器を置き、芳香を薫じた。百千の菩薩は太子の座に就き給ふのを見て、各々は「太子吾が捧げたる寶座に着き給へり」と考へた。

菩提樹は壯麗に裝飾せられ、各吉祥樹には天人等は敬しく華香を捧て居る。

第九十三、菩提樹下の太子。

太子は吉祥より柔軟草を受けて、菩提樹 (Bodhi-druma 畢波羅樹 Pipala) の下に至り、樹を繞つて各方向に面して坐し給ふたが、毎時大地は激震を生じた。終に東邊より西面し給ふた時に微震だもせなかつた。太子は「是れ勝智に達する位置なり。諸佛靜座し給へる不動の場所なり。煩惱の邪網を擱裂する地點

なり」と稱して、軟草を執つて之を振られた。功祚は忽ち自ら整齊の形狀をして、長さ十四肘の寶座を成した。太子は菩提樹の幹を背にして、東面して坐し「我が皮膚、筋骨、身體、血肉悉く枯腐すと雖も、等正覺を成するに非れば此座を起たすと大誓願を起された。そして跏趺座、端身正念して、百雷一時に落つるとも動せざるが如き姿であつた。

太子は畢波羅樹下の覺座に禪思して居られる。兩側には天人と天女龍女(？)が恭敬奉仕して居る。其又兩側には諸天龍が坐して居る。

第九十四、釋尊の降魔。

菩薩なる太子菩提樹下に於て誓願を述べ給ふに當つて、天龍八部は悉く歡喜踊躍して虚空に於て讚歎した。併し第六天の魔王の宮殿は自然に震動して、魔王波旬は大いに心に懊惱を生じた。そして「今沙門瞿曇樹下に端座思惟し久しからずして當に正覺を成すべし。其道若し成すれば、廣く一切を度し、我が境を超越せん。道成らざるに先ち、往て之を壞亂せん」と稱して、手には強

弓五箭を執り、男女眷属の大群衆を率ゐて畢波羅樹下に降つた。牟尼の寂然として動せざる姿を視て偈を以て尊者、足下瘦弱憔悴將に死に近づき給へり、何ぞ斯の如く勤苦のみを事とし給ふや。世間の善行を爲し、梵行を修し給ふに若かずと誘惑した。太子は、汝惡逆の友よ、少善尙ほ我に用ふる所なし。魔王試に告げよ、何の善根を要するや、我に信念、威力、智慧あり、我が勤苦に當りて何すれぞ我に世樂を勸むるや。肥肉落ち去れば心益々靜肅となり、正念智慧禪定愈々固し。我嘗て五欲の樂を極め、既に之に飽き、今や欲樂に意なし。人界世間はれ苦界のみ、敗れて生きんよりは寧ろ戰て死するに若かずと魔王に告げ給ふた。茲に於て魔王は大象に乗り、羅刹、毘舍遮鬼、鳩槃荼、阿修羅、伽婁羅を始めとし百億の全軍を率ゐて來り襲ふた。太子は、汝が軍、人天勝つ能はずと雖も、我れ智慧を以て之を摧破せんと宣うて、端然一髪も動かし給はず、恰も獅子の鹿群に處するが如くであつた。異形の百鬼夜叉等は黒雲を起し、雷霆を呼び攻め立つれど、太子慈悲を以て念じ玉へば、投

げし砂礫は空に懸つて墜ちず、毒龍惡氣を吐けば變じて香風となり、放ちし箭は悉く繽紛たる落花と化した。

是が所謂猪魚驢馬獅子龍頭熊羆虎兕及び諸獸類、或は一身多頭、或は面各々一目、或は衆多の目ある諸惡類の異形の怪物が大舉天地を震撼せしめて攻め寄せたる處である。太子は恬然として左手定印、右手を地に垂れて降魔の姿をして居られる。

第九十五、魔王の三女。

魔王に三女があつて、染欲、能悅人、可愛樂と稱し、其容貌極めて艶麗、妖冶巧媚能く人を魅惑する事天女中第一であつた。波旬は諸女を呼んで、沙門瞿曇、身に法鎧を被り、自在の弓を執り、智慧の箭を鏃し、衆生を伏して我が境界を壊さんと欲す。我れ若し如かずば、衆生彼を信じて皆悉く歸依し、我が土は遂に空しからんと告げ、太子を綺言を以て誘はしめた。魔女三姫は凡百の方法を以て太子を燒したが、寂定として深淵の如く、圓光朗に明珠の

如くであつた。時に魔王は歎じて「我れ太子を狙ふこと七年、正知解脱の佛陀、我遂に隙隙を見ず」と唱へ、魔心慚愧して、天宮に還歸し、群魔は憂感して皆悉く崩散した。

左方に於ては魔王は諸女を集めて太子の誘惑を説き勸めて居る。右方には波旬は立つて樂を奏し、魔女は舞戲し妖媚を作して居る。

第九十六、太子の大悟成道。

悪魔遂に退散し、太子一切の煩惱を斷滅して深妙の禪定三昧に入り、七日の間解脱の安を樂み給ふた。先づ初夜に宿命通を得、過去世を憶念して百千萬の死生悉くを了知し、人生の因果の關係を順逆に兩觀せられた。即ち無明あるが故に行業あり、行あるが故に識意識あり、識あるが故に名色あり、名色あるが故に六處六感あり、六處あるが故に觸あり、觸あるが故に受感覺あり、受あるが故に愛あり、愛あるが故に取努力あり、取あるが故に有善惡の狀態あり、有あるが故に生あり、生ある故に老死憂悲苦惱あり、一切の苦痛



釋尊の降魔 (94)



魔王の三女 (95)



蓮池に於て頂灌 (119)

は此の如くして起る。されば苦痛の本源たる無明を断すれば即ち六處滅し、次第に順を追ふて生老死等も亦滅し、此の如くして一切の苦痛皆断滅すと、十二因縁(十二縁起)を観察し給ふた。中夜に於て天眼通を得て、「一切衆生を見ること鏡中の像を見る如く、衆生の生死、貴賤、貧富、清淨不淨の業は隨うて苦樂の報を受くと、生死海の六道を輪轉して窮りなく、衆生長流に没し、漂泊して依る所のない事を觀察せられた。後夜に於ては漏盡通を得て、諸世間を觀察し給ふた。斯の如くにして諸の現象を次第に佛眼に現前觀察して、究竟第一義を得、一切智明瞭として正覺を成せられた。此時世尊は歡喜に堪へずして成道偈を頌せられた。天神は雲集して空中に天樂を奏して大法を讃歎した。大地は普く震動し、宇宙悉く清明となり、天華は雨降つて牟尼尊を供養した。

中央の菩提樹下の覺座には世尊湛然降魔成道の姿勢を作して居られる。虚空には衆多の神仙は歡喜踊躍し、手には蓮華或は寶器を執つて、頌歌を讃し

妙樂を奏して居る。地上には諸天諸菩薩等は恭敬合掌或は讃頌して居る。

第九十七、成道後最初の七日。

釋尊は成道正覺を得て後も尙ほ七日の間は樹下の覺座を去り給はなかつた。諸天神の大羣衆は降下して、如來にならせ給ふた菩薩(太子)を讃歎頌歌した。恒沙の古佛は來臨して新らしき佛陀に道服を呈した。三千大千世界は赫耀たる光明に浴した。天上に於ては凡ての菩薩及び天衆は歡呼して佛出現し給へり。之有情の白蓮なり。無漏の知海より生じて、世間の道に汚され給ふ事なし。又廣く含識の上に慈雲を布き、法雨を降して羣萌の根芽を沾し、菩提の華實を結ばしむ、善き哉」と叫んだ。

佛陀は樹下座上に矢張成道の印相を作して跏趺して居られる。天の女神又は諸菩薩は諸の樂器を執り或は法華を持つて讃歎して居る。

第九十八、諸天佛陀を灌頂す。

天界の大衆佛陀の所に來り詣でた。手には馥郁たる香水を盛れる寶器を把

つて、恰も菩提樹に注いだ如くに佛陀の頭上に灑いだ。Rūpāvacara-bhuvanaの天人等も同様に來つて世尊を灌頂し奉つた。

如來は中央の覺座に跏趺して居られる。右方には、Rūpāvacara-bhuvanaの天人女等香水瓶、白拂、寶器、等を持つて參詣して居る。左方にも亦天界の大衆來臨して同様に灌頂し讃頌して居る。

第九十九、諸天成道の佛陀を讃偈す。

佛陀正覺を成じて後も、尙ほ菩提樹下の金剛座を起ち玉はざるを見、諸天の中の一人は進み寄つて、佛足を頂禮し、婆伽梵(佛)よ、云何ぞ成道の後尙ほ默然是の如く端座し玉ふやと問ふた。世尊は、吾れ今解脱の樂を受くるなりと答へ玉ふた。諸天は此一七日の禪思の意を解して歡喜し、三十二の偈を以て讃頌した。即ち世尊は今や本願成滿すれど、一切衆生は五濁に覆蔽せられ、薄福鈍根にして智慧ある事なし。如何にして此甚深難解、無上最勝の大法を轉法輪すべきやと、自ら念じて居られたのである。

世尊は樹華美はしき所の中央の金剛座に、端座弘法の姿勢をして居られる。諸天神は恭敬讃頌して居る。

第百、成道第二週より第四週。

佛成道後七日を経て、漸く其座を起つて大遊行を爲された。即ち第二週は三千大千世界を経歴し玉ふたのである。第三週は金剛座の少し東北方に行き、七日間一瞬もなし玉ふ事無くして、唯天の一方のみを凝視せられた。第四週は一定の歩道を繰返し往復し給ふのみであつた。此三七日間(二十一日)は世尊は天界の大乗諸菩薩に對して所謂華嚴の妙法を說法爲し玉ふたのである。吾人の凡眼凡耳にては觸れ得ざるも、佛眼には明に映する世界に對する弘法であつた。

左方には華果豊麗なる幽林あり、其中に鳥獸の遊戲して居るのを觀る。中央に莊嚴せられた金剛座あり、佛陀は其左に立つて居られる。諸天は之に隨伴し、其一人は寶座の左に坐して居る。

第百壹の一、魔王の三女。

世尊が三七日の遊行の後、菩提樹下の金剛座に再び就かれた。魔羅は佛に「世尊、今や涅槃に入らせ給ふや」と尋ねた。佛陀は「否、還良なる衆多の沙門を教化せざる中は涅槃に入らざるべし」と答へ玉ふた。魔羅は杖を執り怒つて地に坐し、長歎して「佛陀吾れを破れり」と稱した。魔王の三女は父を慰めて「佛陀如何に金剛座の雄心勁くとも愛慾の羈を以て縛象の如くせん」と謂ふた。魔王は「人天の無上最勝尊何ぞ是の如き五欲の誘ひに墮すべき」と諫止した。之をも聽かず三女は至り媚を捧げて誘ふた。併し世尊端然踏座して淤泥中の白蓮華の如くであつた。遂に艶妖優鉢羅の如き三女は忽ち其美失せて老婆と變貌した。併し世尊に慈悲を誓願して故の美は再び許された。

最も左方に魔王波旬と三人の妖女は坐して居る。三女は次第に世尊に近着き、遂に其右方には老婆と代れる魔女の遁ぐる形を示されて居る。最も右方には彼等は世尊の許しにより舊の姿を得て居る。此圖は藝の第九十五圖と同

一であつて、或は彫刻者が誤つて同一の浮彫を重複して作つたものかも知れぬとも考へられて居る。併し Lalivastara 中には此詳細は記されて居るとの事である。

第百壹の二、第五週、目真隣陀龍王の禮佛。

佛は第五週を目真隣陀樹下の龍王目真隣陀 (Mucilinda) の住居に結跏趺座し、復七日の間解脱の安を樂み玉ふた。時偶ま雨季なりし故に寒風冷雨は佛陀の頭上に注がれた。龍王は其大身を以て七重に圍繞して佛身を擁蔽し、復た七頭を以て世尊の上に垂れて天蓋を作り、寒冷暑熱風濕蚊蠅諸蟲を世尊の體に觸るゝ事を避けしめた。七日を過ぎて虚空を見るに雲霧は晴れて白日青天となつた。此時目真隣陀は其龍身を隠し、化けて年少童子の形を現じ、佛前に合掌して世尊を恭敬した。世尊は此因縁を以て、偈にて歡喜寂定は至て安樂なり、諸法の甚深を觀するは安樂なり、世間を惱さず、衆類を苦めず、亦た復た安樂なり、世間に於て一切の欲貪を遠離すれば亦た復た安樂なり、能く

我慢の念を捨つれば此樂實に最勝第一なりと説かれた。

龍王は世尊の足下に長跪頂禮して居る、男女龍屬は其後に供養の具を執つて隨從して居る。佛陀は殿中蓮華座上に坐し、跏趺して目真隣陀(文隣)を教化して居られる。其傍には一小兒は臥伏せる小象の上に戯れて居る。

第百二、第六週。

世尊龍王目真隣陀の殿堂と、金流尼連禪の岸の間にある Ziegenhirtenbanian の處に赴かれた。そして途中衆多の托鉢比丘及び隱者に出逢ひ玉ふた。彼等は「天人師瞿曇よ、卿の爲めの險惡なる天候は既に無異經過したるか」と問ふた。世尊は一偈を以て之に答へて行き過ぎ玉ふた。

四天人は世尊に、寶蓋、白拂、蓮華等を把つて隨從し、沙門苦行者は佛前に奉伺し、世尊は之に答へて居られる。

第百三、二商主の供養。

成道第七週を佛陀は、阿闍波羅尼拘律樹下に靜座し給ふた。此時に當つて

Utkala (現時の Orissa) 地方の二商主、帝梨富婆及び跋梨迦は五百の商車を率ゐて、南方から摩揭陀に進んだ。此隊商は須闍陀(Śrīgṛha)吉流支(Kṛishī)と稱する、絶倫無雙の二靈牛が導いて居た。處が此樹下に至つた時、牛車は遽に Khrīka の森の女神の力に依つて停止した。商主等は此坦道に於て、鞭は切るゝも尙ほ車の進まざる不可思議に驚ろいた。此時女神は現れて「友よ、世尊今等正覺を成じ玉ひ、阿闍波羅尼拘律樹下に在り。往いて世尊を恭敬し、麩蜜を奉れ。汝等必ず安樂を得ん」と告げた。時恰も食事時であつた爲め、商主等は麩蜜を執つて、世尊の前に進み、恭敬して「世尊、願くは我等の供養を受けさせ玉へ」と白し、之を奉獻した。

樹下に正思惟し玉ふは佛世尊である。右方に起つは商主等にて、其前に女神を見る。又金剛座下には其女神は跪坐し、其後方には侍女が麩蜜を盛れる鉢を捧げて居る。左方の諸天は蓮華を把つて恭禮し、其左には二匹の獸類を見る。或は二靈牛であるかも知れぬのである。

第四百四、四つの鉢。

時に世尊は「過去諸佛如來は皆手づから食を執らず。古佛は凡て鉢を以て受け玉へり」と想起せられた。空界の主、四天王に之を看取して、金、銀、水晶、綠玉の四鉢を將來奉呈した。世尊は此の如きの寶器は沙門の用に適せずと宣ふて之を退け、一つの石鉢を求め玉ふた。天子毘盧旃那の告げに由り、四天王は四方より各々石鉢を持來し、世尊、此中に麩蜜を受け玉へ」と白して之を呈した。佛陀は之に施物を受けて味ひ給ふた。釋尊が鉢を攝め、手を淨められたのを見て、二商主は頭面を以て佛を禮拜した。

世尊は中央の金剛寶座に施無畏の印相を爲し玉ひ、四天は玉鉢を執つて之を捧げ、中一人は跪坐して居る。其他の天衆は、恭敬合掌して居る。佛の右方に合掌起立する一人は毘盧旃那か。

第四百五、乳糜の獻奉。

隊商の列は此所を過ぎて、村端れに於て牛乳を搾つた。牛は乳汁の代りに

選良なる牛酪を出した。二商主は驚愕して、之が吉凶の占を婆羅門に乞ふた。婆羅門は答へて「之凶徴となす、唯婆羅門に對する布施に、當つる事を以てのみ、贖ひ得べし」と稱した。彼の二商主の親戚に當る *Chardin* と呼ぶ婆羅門は、此牛酪を製選して佛陀に奉獻すべき事を命じた。是に於て、一千の乳牛より搾汁せられた乳酪は世尊に供養せられた。佛は之を嘉納し、嘗めて鉢を空中に投じ給ふた。梵天王は之を受持して、自らの天界に立ち歸り、其眷屬と共に尊崇供養した。商主等は長偈を以て頌讚し、世尊、我等佛に歸依し奉る、我等法に歸依し奉る。世尊願くは我等をして佛門に入らしめ給へ」と白した。世尊は天神及び惡魔に向つて此二商主を加護すべき様に告げ玉ふた。商主等は之を聞いて歡喜踊躍した。彼等二商主は實に歸依佛、歸依法の二法式に由つて佛門に入つた最初の優婆塞である。

世尊は阿閼波羅尼拘律樹下、寶座上に弘法の印相を結び玉ひ、其左方には商主は鉢を執つて乳酪を獻じて居る。右方には梵天王は起立し、其眷屬の大

衆は坐して讚頌して居る。

第百六、梵天の勸請。

二商主出發の後、世尊は阿閼波羅尼拘律樹下に再び立歸り玉ふた。そして自ら此閑靜の處に住して、我れ既に此微妙最勝の法を得たりと雖も、深妙難解にして、唯賢聖のみ之を知る。今貪瞋の衆生を見るに、徒らに誤見に陥り娛樂に耽り、因縁の法は解し難し、何ぞ能く愛染を離絶して涅槃の妙境に到達し得べけんや。寧ろ之を説かざるに若かず。」と心中に念じ玉ふた。此時梵天王は遙に之を察知して、如來、應供、等正覺、沈黙を守り法を説き玉はずんば、世間道に退落破滅せんと思惟し、力士と化現し、天上より降り、世尊の前に現れて、偏袒右肩長跪合掌し、世尊、願はくは大法を垂れ給へ、善逝、願はくは法を説き玉へ、世間の衆生亦た染垢薄くして、之に耐ゆるものありと稱して三回佛に勸請した。世尊は衆生を哀愍して、之を受諾し、世間を觀察し給ふに、多少利根のもの莫きに非ざるを見玉ふた。依つて偈を以て「我れ今甘露

の法を宣ぶ、聞く者須く信すべし。梵天よ、法は微妙最上なり。我れ撓ます之を説かん」と答へ玉ふた。梵天此請の容れられたるを知り、歡喜して佛足を頂禮し、右繞三匝して忽然と妻を隠した。

世尊は阿闍波羅尼拘律樹下の蓮華寶座上に彌陀定印を結んで居られる。左方に梵天王は長跪合掌し、多くの眷屬は隨從奉仕して居る。

第一百七、諸天の勸請。

天界の主帝釋、地神、菩提樹神等の諸神は出現して佛前に現はれ、世尊に法輪を轉じ玉はん事を勸請した。佛之を聽き容れ給へば、諸天は慶喜して天人師、佛、世尊よ、何處に於て初轉法輪を爲させ給ふや」と問ひ奉つた。世尊は答へて「鹿苑の仙人住所の傍なる婆羅奈斯 (Varanasi bei Śāpataka im Migadāna) に於いて」と白ふた。

世尊は樹下を去り、供養莊嚴せられたる寶座上に、弘法の印相を以て端坐して居られる。上空には天帝釋等は飛翔し、右方には地の神々、左方には菩

提樹の諸神は勸請、恭敬、供養して居る。

第一百八、阿藍迦藍、鬱陀羅迦の二梵志の死を確む。

世尊斯く答へて、「此大法を先づ誰に宣説すべきや」と自ら念じ玉ふた。世尊は曩の羅摩の子なる鬱陀羅迦を想起し玉ふた。併し直ちに、彼は利根なるも既に七日以前に死したる事を氣付き玉ふて「此勝妙最尊の大法を聞き得ざるは彼の一大損失なり」と宣ふた。又「耆宿阿藍迦藍は聰明にして、克く之を領解し得るならん」と思ひ玉ふたが、之亦三日以前に既に逝ける事を悟られた。此時 Cuddhāvāsakāvika 神は彼等賢聖の已に人間界を去れる事の確報を齎らした。

世尊は莊嚴せられたる寶牀上に坐し、身を傾けて神々と物語らせ玉ふ。

Cuddhāvāsakāvika 神は跪坐合掌恭禮し、多くの諸神は供養の具を捧げて其後に従ひ、或は侍衛して居る。

第一百九、佛の摩揭陀通過。

世尊は嘗て優婁頻螺の苦行林に侍從した五賢衆を想起し玉ふて「彼の五比丘

は久しく我れに仕侍し、勞苦して怠なかりき、我れは先づ彼等に向ひ法を説くべきなり」と宣ひ、清淨の天眼を以て彼等の在住の處を觀て、婆羅奈斯城、鹿野苑の仙人住所に移り居る事を察せられた。是に由つて彼の處に於て最初の轉法輪を爲すべく出發して、摩揭陀國を經由し玉ふた。

圖の解説不明なるも、多分鹿苑に赴く途中、摩揭陀國の王舍城を過ぎり玉へる處と思はるゝ。中央神殿の如き建築物は頻婆娑羅の王城、右方の世尊の前に立つて、鉢を執り布施し玉ふは王、其背後に蓮華を持ち玉ふは王妃と見得る。

第一百十、アチバカとの邂逅。

世尊は伽耶山に到り玉ふた。此處に滞在せるAjivakaの教會の大衆は出でて奉迎し、佛より放たれて居る身光を見て驚異して、彼等は「瞿曇 (Gautama 喬答摩)よ、卿は何ぞ欣悦に充ちて行き給ふや、又何ぞ卿の皮膚は斯くも金色に輝けるにや、卿の師を誰とかなすと尋ねた。世尊は「吾に師ある事無し。吾は世

間應供、無上士にして最尊なり。我れ獨り等正覺にして永寂涅槃の境に達す。今先づ法輪を轉じて、以て衆生を甘露の法雨に沾はしめ、妙樂の邦土の基礎を開かんとして婆羅奈斯城に赴かんとすと答へて、北行し玉ふた。アチバカは之より道を南進した。

世尊はアチバカ等三人に説示し玉ひ、彼等は佛を恭敬尊崇して居る。一天人は寶蓋を捧げ、伽耶の山中には衆多の禽獸の棲息するを見る。

第一百十一、スダルカナ龍王の供饌。

世尊伽耶市の近くに來り玉ふた時に、龍王 Sudaryana は其殿堂に於て、佛陀に食饌を供せん事を請ふた。世尊は之を受けて其館舎に停まられた。

世尊は右方の寶牀蓮臺上に端坐し玉ふて、一龍は其右方に寶蓋を捧持して居る。龍王は坐下に長跪合掌して恭敬して居る。諸の天龍、龍女等は各々饗應の供物を執つて盛んに款待して居る。

第一百十二、ロヒタバスの款待。

Rohitavastu に於ても亦其市民は世尊を聘して飲食を供設せんとした。佛は此請を容れて供養を受け玉ふた。

右方蓮臺上には世尊は手を伸べて靜に物語り玉ふ。佛前には數多の食饌は設けられ、城中の善男子善女人は皆供物を捧持し、或は恭敬尊崇の相を爲して居る。

第一百十三、ウルビルバカルバの招待。

Urivilvakalpa 市に於ても亦同様に世尊を饗應供養した。世尊は又之を受け給ふた。

右方には佛は起立し玉ひ、天龍は跪坐して寶蓋を捧げて居る。一城の貴顯嫁女等は出で、恭敬供養して居る。左方には美麗なる空の寶座あり、獅子、象等を以つて裝飾せられて居る。

第一百十四、サラチの供養。

其れより世尊は、Anala 及び Sarathi に赴き玉ふた。此處に於ても亦、前同様

に世尊を招待して以て大いに供養し奉つた。

佛は中央の寶牀上に說法し玉ふ。左方には數多の女人、獻貢供養の諸物を捧げ、右方には衆多の善男子は莊嚴の具を把り、或は頂禮恭敬して居る。

第一百十五、世尊と渡船師。

世尊は諸所遊行の後、遂に恒河に達し玉ふた。時恰も其水嵩増大の折柄であつた。世尊は舟師に彼岸への渡船を請ひ玉ふた。舟師は喬答摩よ、先づ船賃を支拂ふべしと金錢を求めた。如來は、友よ、吾に金錢を所持する無しと答へて、空中を對岸に飛行し玉ふた。舟師は驚駭且つ憂慮して、嗚呼、値ひ難き、此無上の供養に價せる渡御を、吾勤め得ざりきと叫んで、茫然自失地に倒れた。蘇生の後、彼は直ちに馳せて王頻婆娑羅の下に赴き、陛下、吾れ沙門瞿曇に船賃を請へるに、彼飛空瞬時にして彼岸に到達せりと伏奏した。爾後王は托鉢徧土の沙門に渡船の賃銀を請はざる様に命じ玉ふた。

如來は渡河、既に岸に立ち玉ふ。華果豐麗なる林中には水禽野鳥、猪鹿を

見、又河上には渡船及び魚族の浮泛を見る。右方の臺上には二人の舟師は坐し、其背後にも亦二人あり、何れも皆驚畏の眼を見張つて居る。

第一百十六、婆羅奈斯城に於ける佛陀。

世尊各地を巡遊しつゝ北行して、遂に大都城婆羅奈斯に着き、城中至る處に托鉢して、布施を乞ひ玉ふた。佛鉢の充つるを俟つて鹿苑の仙人住所に向ひ玉ふた。

一市民は佛前に跪坐し、其背後には二人は立つて、各々鉢を執り、世尊に糜を奉獻して居る。又多くの都人は崇敬して居る。左方には神殿あり、前面に一人あつて蹲踞して之を守護して居る。

第一百十七、五比丘の教化。

世尊の來給ふを望見し、五賢衆は各々相誠めて「友よ、舊主瞿曇來れり。彼は苦行に耐わすして、遂に世樂に染す。若し此處に来るも汝等共に言語を交へ禮敬する勿れ。更に別に小座を設けて坐せしめん」と言ふた。世尊五比丘の

所に至り給ふに當つて、皆覺わす起つて奉迎敬禮した。然れども彼等は世尊を呼ぶに「友喬答摩を以てして」卿は、先に修する處の梵行を以て尙ほ威儀を執持すと雖も、今や既に道を失ひ染欲多し、何ぞ世人以上の法、神通智見を得んや」と言ふた。世尊は「諸比丘よ、如來を呼ぶに『友』を以てする勿れ。如來は應供等正覺なり。如來は道を失はず。既に甘露の境を獲、當に汝等に教誡せん。須く諦聽すべし」と宣ふた。遂に「愛欲の凡愚無識なるもの、及び徒らに身體を苦しむるは涅槃の眞因に非ず。賢聖八道なる中道の知見を得、苦集滅道の四聖諦を以て、吾が法眼明に智慧清淨なり。梵王、魔羅、沙門、梵志、人天、一切世間、吾が無上正覺を成せるを知る……」と説き玉ふた。之を佛の初轉法輪と呼んで居る。

世尊左方に於て法輪を轉じ玉ふ。苦行林中の五比丘は婆羅門の姿を爲して坐し、世尊の來臨を見て相誠めて居る。

第一百十八、改宗の五尊者。

橋陳如は如來の說法を聽聞して、直ちに歡喜の念を生じ、諸塵垢盡き、法眼淨を獲て、生者必滅の理を悟つた。世尊は之を讚して「橋陳如已に知れり」と言はれた。遂に橋陳如は法を見、法を得、法を辨じ、淨智明となつて、世尊に「世尊、願くは我に出家を與へ、具足戒を授け給へ」と請願した。之より婆沙波、跋陀梨迦、摩訶那摩、阿濕婆恃の四比丘を順次に教化し玉ふた。茲に於て、彼等は遂に一切の執著を離れ、無漏の解脱に住した。時に阿沙茶月十四日の夜であつた。

世尊は中央の蓮華座上に說法し給ひ、五比丘は婆羅門の姿を變じて佛弟子の相を爲して居る。左方には四人の沙門華香を執り或は合掌禮拜して居る。林中の華果樹鮮麗を極め、鳥獸遊戲して居る。

第一百十九、蓮池に於ける灌頂。

五賢衆等は世尊に隨從し、華葉鮮榮、莊嚴寂靜なる蓮池に赴き、茲に於て如來を灌頂し奉つた。

世尊は蓮池中の華台上に彌陀定印を結んで正坐し玉ふて、五比丘中二人は寶瓶を捧げ、兩側より如來の頭上に灌頂して居る。右方には龍王は寶蓋を把り、龍妃は蓮華を持つて居る。左方にも亦龍王跪坐して寶器を執り、龍妃は合掌禮拜して居る。

第一百二十、弘法の世尊。

世尊は、是の如く灌頂を受け玉ふた後、今や弘く說法勸化の時到れるを悟られた。遂に三つの寶牀を遶り、第四の寶坐上に端坐、禪定に入り、佛身より背光を演出して、普く十方世界を照し玉ふた。此光明中に偈が聞えた。其偈中には佛の降誕が讚頌せられて居た。此時に十萬の諸菩薩は現れ、天帝釋及び梵天王は其大眷屬を率ゐて降來した。彼等は世尊に弘法の時機の延期せられざらん事を勸請した。轉輪聖王菩薩は世尊に寶玉燦然たる金輪を將來し、二三偈を讚して之を奉獻した。世尊は之を受けて寂定禪思し、夜に入つて尙ほ此姿を變へ玉はなかつた。そして第二夜に於て世尊は靜に口を開き、更生

の説法を始め、遂に最後の夜に於て、大法の宣説を爲し玉ふた。即ち、出離を求めんとするものは、下劣の愛欲に墮する事、及び苦行を以て身骨を徒勞せしむるの兩端の無識を避くるにありと稱して、最勝道、四聖諦を開闡し玉ふた。斯して、彌勒を始め數千の諸菩薩の教を解説して、佛法弘通の方便を示し玉ふた。然る後世尊は、諸天諸菩薩に向ひ *Taliavistara* の宣教せらるゝ處は、世界何地の涯と雖も、逆政、盜難、饑餓、不和、争鬪、神鬼、天龍、夜叉等の八難其跡を斷つと説き玉ふて、特に五比丘を顧み、彼等に尊者の名を授け玉ふた。諸菩薩、諸天、聲聞、人間、修羅、餓鬼、其他は此如來の無上甚深微妙法を拜聽して、歡喜踊躍、皆無等等、阿耨多羅三藐三菩提心を發した。

中央寶牀上には、本師釋迦牟尼世尊、弘法の姿勢を爲し玉ふて居る。空中には天の大衆雲集し、又右方には諸菩薩左方には諸比丘衆、慶喜恭禮讚偈して居る。

佛陀傳結論

参照せる
佛傳
以上、一百二十の壁面に彫まれた釋迦傳を略解したが、大體は其原本と見るべき經典 *Taliavistara* に順據し、尙ほ都合上間接ながらも、佛本行經、佛本行集經、普曜經、佛所行讚、五分律、太子瑞應本起經、佛本生經、スッタニパータ、マハヅツカ、デイヰヤアヅダナ等の諸經典をも幾分宛、参照し解説を試みたのである。

佛傳八相
中二相を
缺ぐ理由
此佛傳圖を拜觀し終つて、稍々奇異に感ずるのは、佛傳八相の降兜率、托胎、降誕、出家、降魔、成道、説法、涅槃の八期中最後の二相は、説法の一部を除き表示せられて居らぬ事である。其理由は、主として此佛塔中他の諸壁列面に彫まれた諸經傳等が、殘る二期に相當するものと見得るのである。

佛傳に對
する私見
凡て之等佛傳を見て、世人中には往々、「之は單に神話に過ぎず」と皮相の觀察を爲す者と、「之は佛陀釋迦牟尼の自内の描寫なり」と内面的に判斷するもの等がある。勿論諸佛傳中、原始的の小乗部のものは比較的、佛陀の御生涯

を所謂寫實的に記したものであつて、大乘部のものは印度諸神を多く攝取し、其潤色の度甚だしく、神話的分子の多量なる事は、印度教の影響を受けたものとして、當然止むを得ざる處である。

併し彼の迦毘羅城に降誕し玉へる釋迦牟尼世尊を、何處迄も吾人と接近せしめ、彼も亦矢張血あり肉ある人間なりしと、徒らに人間味を附して、之を喜ぶもの在りと雖も、私は彼の佛傳に對して、強ち種々無用の揣摩臆測を爲すを要せぬと思ふのである。釋迦は如來である。覺體である。世尊は全然吾人と類を異にする神では無く、又吾人と類を同じふする人間でも無い。彼は元來何ものでも無く、又何ものも凡て彼ならざる無き法身佛である。そして彼は、吾人人類の爲めに、人間の姿を化現し玉ふた處の應身佛であるのである。山川草木悉く成佛して深妙の法を説くと雖も、吾人群萌は如何で之を聽聞領解し得る事が出来るであらうか。吾人凡愚の衆生には、吾人と其姿を同じふする形をなし、又言語に依り吾人の鼓膜に觸るゝ等の方便を以て教化をなし

給ふを要したのである。即ち姿色清淨なる三十二相、八十隨形好は、先づ吾人の爲めに眼窩を通じて欣悅せしめ、金口より出づる八音の和言は吾人の耳朵に響いて歡喜せしむる爲めのものであつた。次に釋尊の取り給へる八相の徑路は、大無量壽經にも示されたるが如くに、皆諸佛如來が菩薩より成佛し玉ふ處と同一の道程である。依つて之は獨り釋迦牟尼尊のみの取り玉へるものに非ずして諸佛世尊の等しく現じ玉ふ八相と見るのである。尙は當時天竺に通用せられた梵語は、元來地上の言語に非ずして、淨居天以上に専ら用ひらるる動搖無き言葉である。即ち梵天王の常に與り保つ處のものである。依つて其文法の完全に意味の通達する事は、今日地球上に流用せらるゝ各國語の、到底追従を許さざる處と聞いて居るのである。即ち此大法を説かんが爲めに存した言語であるのである。又當時の印度國中に於ては、百餘の哲學諸派あり、其思想の華は爛漫として亂れ咲き、甚深難解の勝法を拜聽するに價する賢聖梵志あり、數論聲論等を研鑽して、以て能く大數妙音を理解明瞭し

得たのである。又其國土の人口は稠密に、交通は四通八達して教法の宣布に至便の地であつたのである。又世尊は「我は佛陀なり。吾に師ある事無し。吾は世間、應供、無上士にして最尊なり。我れ獨り等正覺にして永寂涅槃に達す」と、所謂「天上天下唯我獨尊」を宣言師子吼し玉ふたのである。右に擧げたる如く實に世尊釋迦牟尼は凡夫の苦行證悟せるものに非ずして、其眞身は芥子許りも無き不可思議の妙體である。唯諸の衆生を利益せんが爲めに、權りに滅盡を示し玉ふたのである。眞に天來の莊嚴である。故に吾人は釋迦牟尼如來を以て、何處迄も人間なりと觀察し、又佛諸傳を以て濫に凡夫の智見より異相に解釋するを要せぬ事と思ふのである。

「法身は正覺である。

法界は即ち如來である。

佛は涅槃せぬのである。

正法亦滅する事は無いのである。

値ひがたき佛恩に依り、茲に之を誌し得たる事を感じると同時に、今上梓せられんとする本書を通讀して、折角諸家の勞を煩はし乍ら、私の淺學菲才の爲めに、何等價值無きものとした事を深く慚愧する次第である。

索引

ア行

(ア)		
阿沙茶	Āśāḍha	262,
阿私陀(仙人)	Asita	184, 185, 226,
阿闍世(王)	Ajātaśatru	31, 70,
阿闍波羅	Ajapāla	249, 250, 252, 253, 254,
阿斯那(樹)	Asena	230,
阿難(阿難陀)	Ānanda	197,
阿耨多羅三藐三菩提	Anuttarā Samyak-Sambodhi	161, 264,
阿奴摩(阿菟比耶)(川)	Anuvamā	213,
阿藍迦藍(梵志)	Ārāḍa-kāḷama	218, 219, 220, 255,

阿蘭若(林)	Araṇya	223,
阿修羅	Asura	176, 240,
阿濕婆特	Asvajit	224, 262,
阿沙佉(月)	Aśadha	213,
阿伊優哩鳴	A, i, u, e, o,	189,
阿順那	Arjuna	24,
阿耆毘伽	Ājivaka	256, 257,
阿闍如來	Aksobhya	43, 44, 81,
阿彌陀如來	Āryāmitābha	43, 45, 81, 84, 85, 88,
阿育王	Aśoka	32, 68, 98, 130, 136,
阿闍婆吠陀	Atharva-veda	59,
アマラーゾチー	Amarāvati	73, 154,
惡魔		227,

阿地瞿多三藏		57,
闍刺樹那	Arjuna	169,
アジヤンタ		70, 128,

(1)		
因緣		253,
一生補處	Ekajāti-īratibuddha	151,

(ウ)		
優多羅(盈滿)	Uttara	229, 232,
優鉢羅		247,
優陀夷	Udayin	202, 205, 206,
鬱陀羅迦(烏特迦)	Udraka	223, 255,

梵	字	頁
ウトカラ	(今, Orissa, Utkala)	250,
優波尼沙陀	Upaniṣad	173,
優陀延	Udayana	188,
優婆塞	Upāsaka	252,
優婁頻螺(地)	Uruvilvā	224, 228, 233, 255,
優婁頻螺迦葉	Uruvilvākāśyapa	258,
(エ)	Ugratejas	166,
盈滿(優多羅)	Pūrṇā	229,
閻浮樹	Jambu	190, 191,
(オ)		
王舍城	Rājagṛha	70, 164, 220, 223,

應供	梵	頁
	Arahat	253, 257, 261, 268,
	Orissa	98,
	Ojopati	236,

カ行

(カ)	梵	頁
覺座	Bodhimarṣa	237, 238, 239, 243, 244, 245,
迦毘羅城	Kapilavastu	68, 163, 166, 168, 175, 176, 177, 179, 181, 187, 192, 207, 209, 213, 216, 217, 266,
迦梨迦(迦羅)	Kāla, Kālika	236, 237,
迦樓羅	Garuda	144, 145, 176, 240,

梵	和	漢
Saṅkṣumītarāja	開敷花王如來	44, 46,
Kaṇṣka	迦膩色迦	27, 29, 37, 68,
Avalokiteśvara	觀世音	45, 46, 133,
Kalinga	ガリソガ	120,
Kaṇṭhaka	健陟	211, 212, 213, 214, 217, 218,
Ghāts	ガーツ	87, 128,
Gayā	伽耶(象頭山)	256, 257,
Gandhāra	健駄羅	98, 133, 154,
Rāga	可愛樂	241,

(キ)
 吉祥 Svastika 237, 238,

Boḍḍidrum	吉祥樹(菩提樹)	237,
Kirī	吉流支	250,
Jeta	毘多	128,
Jeta	祇多王子	72,
Jetavana	祇園(精舍)	72,
Garuda	金翅鳥	235,

(ク)

Kuṅḍjarakuṅḍja	クソソヤラクソソヤ	8,
Gupavarman	求那跋駄羅	57,
Kuṣa	功祇(草)	238, 239,
Kuvera	俱吠羅	187,
Kumbhāṇḍa	鳩槃荼	211, 240,

苦集滅道	(苦 <i>Duḥkha</i> , 集 <i>Samudaya</i> , 滅 <i>Nirodha</i> 道 <i>Marga</i>)	261,
苦行		209, 220, 223, 224, 227, 228, 230, 232, 233, 249, 261, 264, 268,
具足戒	<i>Uṣasampada</i>	262,
グジャラット	<i>Gujarat</i>	98, 113, 118, 119, 120,
(ケ)		
華嚴(經)	<i>Garḍavyūha</i>	159, 246,
乾闥婆	<i>Gandharva</i>	175, 191, 211,
解脱	<i>Mokṣa</i>	208,
月天	<i>Candra</i>	187,
堅那羅		87, 133,

(コ)

憍陳如	<i>Kauṇḍinya</i>	224, 262,
五比丘	<i>Pañca-bhikṣavaś</i>	224, 225, 234, 255, 260, 263, 264,
恒河	<i>Gaigā</i>	196, 259,
恒沙		244,
拘盧舍	<i>Krośa</i>	196, 197, 198,
瞿曇	<i>Gautama</i>	239, 241, 229, 256, 260,
金剛座	<i>Vajrasattva</i>	245, 246, 247, 250, 251,
喬答摩(瞿曇)	<i>Gautama</i>	259, 261,
憍奢耶(衣)	<i>Kāśāya</i>	216,

サ行

- (サ)
- サンジヤヤ(王) Sañjaya 8,
 サルナト 68,
 サンチー(塔) Sañchi 73, 139,
 サラチ Sārahi 258,
 サマナス Samanas 236,
 三十二大人相 Dvātrīṅgaṃ-mahāpuruṣa-lakṣaṇāni 182, 234, 267,
 三界 (欲界 Kāmadhātu, 色界 Rūpadhātu, 無色界 Arūpadhātu)
 173, 192,

- (シ)
- 小乘 Hinayāna 34, 266,
 涇婆濕婆(宗) Śīva 8, 11, 59, 187,
 車匿 Chanda 211, 212, 213, 214, 215, 216, 217, 218, 225,
 色究竟天 Akanīṣṭha 217,
 藥林山 235,
 釋提桓因(除羯羅因陀羅) Śakra devānām Indra 212,
 沙門 Śramaṇa 174, 192, 200, 206, 216, 217, 218, 223, 239,
 241, 247, 249, 251, 259, 261, 262,
 舍利 Śāriya 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 59, 69, 70,
 115,
 出家 Pravrajya 184, 191, 206, 208, 209, 212, 214, 215, 216,
 222, 223, 265,

釋迦牟尼佛	Çakyamuni-Buddha	43, 45, 51, 55, 56, 66, 148, 149, 161, 191, 264, 265, 266, 267, 268,
釋迦(釋種及紀元)	Saka	8, 97, 103, 106, 109, 112, 133, 135, 177, 183, 199, 218, 265,
釋迦傳		252,
シカンゼン	Çikanden	261, 264,
四聖諦	Çatvāri āryāni satyāni	183, 195, 203, 208, 217, 226,
悉達多(太子)	Siddhārtha	81, 168, 169, 180, 182, 251,
四天王	Çatur-mahārājānas	144,
樂羯囉(チャクラ)	Çakra (Tyakra)	170, 255,
正念正智	Çuddhāvāsakāyika	242,
正知		240,
正念	Samyaksamīti	253, 261,
初轉法輪		

初禪	Prathama-dhyāna	191,
聲聞	Çrāvaka	264,
淨幢(菩薩)	Çvetaketu	161, 162,
淨飯王	Çuddhotalana	163, 168, 171, 172, 174, 175, 176, 177, 179, 182, 183, 184, 185, 188, 190, 192, 193, 194, 197, 201, 203, 207, 209, 217, 225, 227,
耆那(教)	Jaina	31,
淨居天	Çuddhāvāsa-deva	210, 20, 211, 215, 216, 267,
寂滅		209,
寂滅道		219,
正覺山	Prāgbodhi-giri	55,
娑羅(樹)	Sāla	180, 181,

(ス)			
須達長者	Sudatta	72,	
須彌	Sumeru	115, 191, 196, 207, 226, 236,	
スツタニパータ		265,	
蘇利耶	Sūrya	187,	
須闍陀	Sujāta	228, 229, 230, 231, 232, 234, 235, 250,	
スバルナブラパーサ	Suvarṇaprabhāsa	237,	
(セ)			
世尊	Bhagavat	39,	
雪山	Himālaya	166, 177, 184,	
制多(支提)堂	Caitya	69, 70, 71, 72, 73, 74, 75,	
施無畏印	Abhayaṅgīda Mudrā	44, 50, 251,	

禪那(禪定)印	Dhyāna Mudrā	142, 219, 242,	
仙人	Rishi	166, 184, 191, 200, 206, 213, 223, 233, 236,	
		256, 260,	
選友	Viśvāmitra	188, 189,	
善逝	Sugata	253,	
染欲	Tiṣṇā	241,	
善覺長者	Suprabuddha	181, 193,	
禪思		238,	
(ツ)			
孫陀利	Sundarī	206,	
率都婆	Stūpa	11, 21, 22, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34,	
		35, 37, 38, 62, 63, 64, 67, 68, 69, 70, 72, 73, 74,	

僧	Saigha (Saing)	71,	81, 82, 88, 103, 123, 125, 139, 147, 148,
僧祇	Sarigītas	121,	
僧伽藍	Sarighārāma	8, 71, 73,	
象の穴	Hastigarta	196,	
孫陀羅難陀	Sundarānanda	197,	
象頭山	Gayā-Śirsa	224,	

タ行

(タ)			
帝釋(天帝釋)	Çakra devānām Indra	81, 161, 168, 175, 181, 221, 230, 254, 263,	
荼毘	Jhāpita	31,	
大日如來	Mahāvairocana	41, 43, 44, 48, 56, 57, 81,	
多羅	Tārā	198,	

大愛道	Mahā-Prajāpati	184, 186,	
提婆(提婆達多)	Devadatta	195, 197,	
托鉢		221, 249, 260,	
大乘	Mahāyāna	33, 39, 54, 61, 133, 246, 266,	
提婆陀訶(城)	Vaṅvāna	179, 193,	
大自在天		185,	
大黑神		86, 87, 88,	
陀羅尼	Dhāraṇi	33,	
タカツトイバハイ	Takht-i-Bahai	74,	
大方廣莊嚴經	Tallāvistara	161, 248, 264, 265,	

(チ)			
竹林園	Vaṅvāna	72,	
柱	Stambha	65, 69, 73,	

Dhyāni Buddha

149,

(ヲ)

天(天宮)

Devaloka

175,

天龍

264,

天帝釋

(Cakra) Devānāṁ,

87, 162, 167, 169, 171, 180, 182, 183, 187, 200,

215, 235, 263,

提頭賴吒天王

Dhṛtarāṣṭra (?)

211,

天鼓電音如來

45,

鉄多羅樹

198,

帝梨富婁

Trapusa

250,

轉法輪印

Dharma Cakra Mudrā

149, 256,

轉輪聖王

Cakravartī rāja

173, 184, 226, 263,

ダイグヤアグダナ

265,

泥洹經

Nirvāṇa

121,

(ト)

等正覺(阿耨多羅三藐三菩提 = 同ジ)

253, 257, 261, 268,

兜率天

Tuṣita

161, 162, 165, 169, 170, 172,

頭樓那塔

70,

塔婆

Thūpa

26, 79, 80,

幢

Dhvaja

65, 69, 73,

ナ
行

(ナ)

那羅迦

Nāraka

184,

那羅延

Nārāyaṇa

187,

難陀

Nanda

195,

南無佛陀	1,	
ナガラクルトアガマ	Nāgarakṛtāgama	11, 20, 23,
(二)		
涅槃	Nirvāṇa	219, 222, 223, 247, 253, 257, 261, 265, 268,
涅槃經		31, 32, 115,
尼拘律(樹)	Nyagrodha	229, 232, 249, 250, 252, 253,
如來	Tathāgata	39, 244, 245, 251, 253, 259, 261, 262, 264, 267,
		268,
尼連禪	Nairāṇjanā	224, 225, 226, 231, 232, 233, 234, 235, 249,
(ノ)		
能悅人	Prīti	241,
能生印	Bhūmisparga Mudrā	142,

ハ 行

(ハ)		
般涅槃	Parinirvāṇa	39,
波闍波提(摩訶波闍波提)	Prajāpatī	225,
婆旬(魔王)	Pāpīyān	227, 239, 241, 242, 247,
パドマ	Padma	218,
槃荼婆山	Pāṇḍava	220, 222,
バルファート	Barhut	73,
波羅奈斯(城)	Vārāṇasī (Benares)	154, 164, 254, 256, 257, 260,
婆羅門	Brahman	9, 112, 114, 116, 131, 150, 164, 166, 167, 173,
		174, 177, 182, 183, 186, 188, 192, 194, 210,
		218, 224, 252, 260, 261, 262,

婆羅門教		8, 31, 57, 59, 60, 61, 112, 114, 115, 121, 122,
婆履(跋梨迦)	Bhalika	250,
貝多羅(葉)	Patrī	189,
跋伽(仙)	(跋迦婆)	218,
婆娑波		224, 262,
跋伽梵(佛)	Bhagavān	245,
跋陀梨迦		224, 262,
婆私吒族	Para	193,
		22, 23,
(c)		
辟支佛(緣覺)	Pratyeka-Buddha	164,
七重樓閣	Satta-Bhūmaka	62,
譬喻經(阿波陀那)	Avadāna	159,

畢波羅(樹)(菩提樹)	Pippala	238, 239, 240,
頻婆娑羅	Bimbisāra	221, 222, 256, 259,
毘逕拏(毘奴)	Viṅṇu	59, 60, 144, 145,
毘盧折那(毘盧旃叉、盧旃(毘盧遮那佛))		44, 51, 56, 62, 148, 149, 251,
比丘	Bhikṣu	32, 162, 221, 222, 261, 262,
毘摩羅園	Viralā	188,
毘尸婆梵仙	Vigva	206,
毘留勒叉(增長天)	Virūḍhaka	211,
毘留博叉天王(廣目天)	Virūpākṣa	211,
毘沙門天王(多聞天)	Vaiśravaṇa	211, 221,
毘舍遮鬼	Bisfula	240,
	Vimalaprabha	231,

(フ)		
富樓那	Pārva Maitrāyaṇīputra	129,
普賢(經)	Samantabhadra	45, 159,
不空成就佛	Amoghasiddhi	43, 45, 81,
鉢喇特奇拏	Pradakṣiṇa	81, 160,
補處		165,
不思議		39,
佛(佛陀)	Buddha	13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 21, 22, 23, 24, 54, 60, 130, 133, 145, 160, 162, 164, 183, 184, 215, 226, 229, 242, 244, 245, 246, 247, 248, 249, 251, 252, 257, 260, 265, 268,
佛陀伽耶		68, 150,
佛舍利		61,

佛本生經		265,
ブロモ	Brama	24,
(〜)		
ベシヤウル	Peshawar	68, 74,
蛇	Nāga	143,
(ホ)		
寶幢如來	Ratnaketu	44, 46,
寶生如來	Ratnasambhava	43, 44, 81,
本生譚	Jātaka	159,
法身	Dharma-kāya	39,
梵語	Sanskrit	15, 16, 19, 21, 24, 26, 71, 189, 267,

菩提流志	Bodhirutchi	57,
菩提留支	Bodhirutchi	57,
菩薩	Bodhisattva	41,
菩提樹	Bodhi-taru	234, 235, 236, 237, 238, 239, 243, 245, 247,
梵天王	Brahmā Sahāmpati (Svayāmpati)	81, 162, 163, 168, 169, 180, 181, 183, 221, 229, 236, 237, 252, 253, 254, 261, 263, 267,
報沙星	Pausa	170, 178,
菩提	Bodhi	200, 201, 223, 244,
ボロブドゥル	Barabodoer	1,

ト

(マ)

魔王	Māra	239, 240, 241, 242,
摩揭陀(國)	Magadha	70, 220, 225, 256,
摩訶那摩(釋種の王)	Mahānāman	193, 194, 198, 210, 224, 262,
摩訶波闍波提	Mahā Prajāpati	183, 210, 214,
魔羅	Malla	247, 261,
摩耶夫人	Māyā devī	163, 167, 168, 170, 171, 172, 174, 175, 179, 181, 182, 183, 226, 227,
摩尼寶	Mani	180, 214,
マハガアツカ	Mandāra	265,
曼荼羅	Mandāra	22, 25, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 46, 47, 49, 50, 51, 52, 53, 55, 56, 57, 58, 62, 63, 64, 66, 75, 76, 81, 88, 132, 133, 147,

マニキヤラ
※

品

Manikyāla

139,

114

摩尼劍

Mani

215,

曼荼羅華

165, 233,

マハボデー

68,

マイソール

Mysore

98,

(ミ)

彌勒

Maitreya

45, 46, 133, 151, 152, 165, 264,

彌勒經

159,

(ム)

無畏

Abhaya

50, 63,

無憂(林)

Ayoka

171, 172, 174, 182,

無明

Avidya

242,

目真降陀(文隣)

Mucilinda

248, 249,

無量壽如來

Amitāyus-Tathāgata

45, 46,

無量壽

Amitāyus

209,

無量壽經

267,

無上士

Anuttara

257, 268,

無厭足王

Anala

258,

(モ)

モリヤ(族)

Moriya

31,

文珠

Manjuṣrī

45, 46,

ヤ行

(ヤ)

藥叉(夜叉)

Yakṣa

171, 175, 211, 240, 264,

耶輸陀羅

Yaśodharā

192, 193, 194, 198, 199, 202, 207, 210, 212,
214, 225,

(ユ)

由旬

Yojana

213,

瑜伽(派)

Yoga

63, 218,

(ヨ)

與願印

Varada Mudrā

44, 50,

ラ行

(ラ)

羅漢

Arahat

164, 216,

羅睺羅

Rāhula

212, 213,

羅摩

Rāma

223, 255,

ライバタ

Raivata

218,

樂園

Ārāma

71,

ラダ

Rādā

230,

羅刹

Rākṣasa

240,

羅睺

Rāhu

58, 144,

ラジヤカ

Rājaka

218,

(リ)			
龍	Nāga	144, 175, 211,	
龍王	Nāga-rāja	233, 235, 237, 248, 249, 257, 263,	
龍女		178, 233, 234, 257,	
リソガ(陰陽神)	Liṅga	8, 121,	
龍猛菩薩	Liṣipadān	164,	
		57, 66,	
(ル)			
盧里尼	Lumbini	179, 180, 226,	
ルババキヤラゾバナ	Rūpāvacara-Bhuvana	245,	
(ロ)			
樓陀羅	Rudra	59,	

鹿野苑(鹿苑)	Mṛgalaṅka	68, 234, 256, 260,
ロヒタバスタ	Rohitavastu	258,
老病死	Jarāmaraṇa	202, 205, 208, 209, 219, 243,

リ行

(ラ)		
吠舎佐(月)	Vaiśāka	170, 228,
吠舎離(城)	Vaiśālī	218, 219,
	Vara-mudrā	142,
	Valga	236,

(井)

毘訶羅

Vihāra(Wihāra)

65, 69, 71, 72, 74, 75, 76, 97, 98, 99, 120,

(丑)

吠陀

Veḍa

59, 163, 164, 173,

毘舍離

Vesāli

70,

Venu

236,

大正十三年十月一日印刷
大正十三年十一月三日發行

ボロフドウル奥附

〔定價金參圓貳拾錢〕

著者 井 尻 進

發行者 青 木 文 教

印刷者 蘆 澤 民 治

印刷所 蘆 澤 印刷所



上海星加坡路五無憂園內

上海寧路拾四號

上海寧路拾四號

發行所

上海星加坡路五
無憂園內

大

乘

社

ス

大賣捌所

上海文路壹壹四號

日華佛教會

(振替口座下關六四壹〇)

東京市京橋區日吉町

民友社

(振替口座東京壹參壹〇〇)

大阪市南區水崎町

中山太陽堂太陽閣

(振替口座大阪貳參四)

神戸市元町通五丁目

寶文館

(振替口座大阪九五貳)

8/18
ハナク

徳久
東京

636
167

終

